

自娛香錄

十二

昭和七年十二月上浣起筆

特別
14
1919
448



嵐山春雪
鐵廬外史



176713

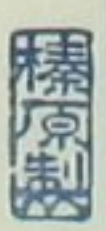
自娛老毛錄十二

昭和七年十二月上浣起筆



十二月三日 冬のぬい活方から書物をあかして来た
日比野中野村高(南次郎)の古稀記念と、
皇一七回勅命の文を出版せんとして企てられたこと
表紙のあつたか、まゝに成ゆいて一冊五冊寧静なる
文存と二部字を来た。上海のやうに宋版活字に
刷行し日本紙を用ひてみるのむすに極上出来かあるの
ちの故肥田中畏と印の詩約を刺せんとして
此春貴族が出来し余の序を徹し、
と次来香とと法名が無つたか、
いんも上様せん

て錦糸巻(約)約百頁一冊と定めて来た。尚ほそふ
ハあるの圖書の寄贈と受けた。此巻のの昔坪成文
巻高紙流去か大きな本巻を持ち来り、背つて七
らといとよみて出た書物と見ると、陳壽の三四志の
和成び、余の家の中蔵び各冊、地味巻の花記が
あり、其書「先存」て即高と先存の巻をいふ。
蓋巻の巻延元年とあるから拾へる余の生涯の
年々書めんといふのである。あふ西条の傳名と併
外傳に愛印しれと思へる。あふこの書家から
出たとよみて出た。此前も高紙から余の家の中蔵
史記評本を贈らんといふことある。此巻の巻の今つ價
の巻に康ろるとよみて、蘇主が受けてるんば懐かし



味である。自分も去年時代三四志を復して、いことか
あふ或、此巻であつたか、いふ。風物も今も余
つ引流中、無聊を感する。此巻もあつたか、い
へき歎、

○用に乗して、肥田の錦川道(約)を讀む、短の詩六七
百首、多くは心傳在中の心をも如し。晚年時、郵
日改も余の心伝を示す。時事に關するもの多し。い
る人、小照の如く、各首作者の風格を映出する。予も
誘過に錦川橋元の詩を讀み、又も、坐るん感懐、
坊、いふものあり、予も往年此川の瀬、川題、其の
や錦川舟予と跡を尋ね、幹、開、金成つて錦
川見ると、及んず、異郷、死す、予も遺詩を讀んが

豎然以う得こぞく

魁加次川堤橋元宮照三首

香雪十里燦為雪、山の遠山お映照、扇影
釵走人如織、紅華幻出墨、花

経る規劃去回堆、疏篔印成跡、の通、沿岸城
蛇三萬八、視花人立彩霞中

辰未兮照感無量、飄泊多年滯吳鄉、某其某
邱陳海、杳豎然獨自嘆滄桑

○市街戦、軍市上、厄ふむ花のよと交へてあるが、左の漢詩
市街は日本が上海が市街戦と誤義をくさる、世界の當り
任職しるの難儀の實験もしし。上海の各回の寄合場を
てあるから、矢矧に砲火を浴する譯は、力の面こといふ論、

漢詩

河北道の幅が一定し居るが、おまけに道がくまり曲つて
袋路が多く、通り抜かると思ふと行どまりの家があるが、
全く迷宮米路があるが、装甲車や戦車の使用は全
く不可能の側射砲とよを用ゐる以外は、兵士の隊
のやうく、バツバツと進むのよも、真にジリッとするよ
ひあつたとき、海軍中佐栗田英次中が砲台四
本、書つてゐるのを、左の如くである。

敵の據りの支那家を、西洋家高の壁や天

井を煉瓦或は厚くて堅土塊を以て作つて居つて、立派な散兵壕、掩兵壕の役をする。野戦に於ては敵は、其の據る第一線を破られた時は、退いて第二の陣地に據る様に豫め、準備した陣地に據つて抵抗を續ける。若し此の據るべき第二の陣地を持たぬ場合に、第一線を破られた時は、一生懸命背面に逃げ、追撃する砲兵、歩兵の打つ弾の届かざる處迄、逃げ延びて初めて停止するこゝが出来るに過ぎない。然るに市街戦に於ては壁や塀なき陣地代用の障害物が十重、二十重に續き、今據つた處を失つても一足下れば又新しい陣地があり、更に其の後方に此様な陣地が無數に續き、所謂歩兵の抵抗を完全に行ひ得るのである。加之南北の支那兵の據つた町は、事變前より、防禦正面の壁には銃眼を作り、横壁は打抜いて、左右にズット通つた通路を作り、道路補裝のコンクリートの下には穴を掘つて、砲彈、爆彈より免れる施設を作つて居つた始末で、愈々此障害物を多くして居つたのである。

特種の大砲を用ひねばならぬ。又見透の付かぬ爲部隊長が隊を指揮するにも、他隊と聯絡するにも大なる困難が伴ふ。便衣隊の活動には詭向である。建築物を利用する障害物の構造が極めて堅固である爲めに、大砲の弾位では容易に壊れない等、數へても數へ切れぬ程の困難があるが、最後に最も大事な一つを舉ぐれば、由來、支那兵に對しては緒戦即ち最初の第一戦に殲滅的打撃を加へることを最も有利とするのであるが、市街戦殊に上海の様な國際都市では思ふ存分にその實施が出来難い事であつた。

然らば市街に於て、敵が頑強に抵抗を續ける場合には如何にせば良いか。今回の南北の敵の如きものに對しては、飛行機を用ゐるのを最良策とする。先づ空中を制して自由に我飛行機を活動し得る様にし——上海に於ては其の通りに行つた——敵の據る市街を爆破して、困難なる市街戦の特質を滅却するに共に陸上部隊と併進することが最良の策である。

上海に於ては、我第一航空戦隊や能登呂の飛行機は空中を制した。敵は我飛行機の活動し、搭乗員の目の見ゆる日中は、隠れて居り、飛行機の影を見ない黎明暮夜、或は夜中に戦を挑む狀況であつたが、只残念なことは、上海は純然たる支那の都市

—(市) 街

に非ずして、世界各國の利害關係錯綜せる國際都市である關係上、共同租界上空の飛行機、黃浦江上にズラリと並んで碇泊せる數十隻の外國軍艦直上の飛行を遠慮せる爲め、南北上空の自由なる活動に制限を受け、殊に極力無辜の民を傷けぬ爲め、爆撃の前には必ず周到な偵察を行ひ、現に敵の多數が據つて居る場所を爆撃せねばならなかつた爲、歐洲大戦中行はれた都市空襲の様に都市を片端から爆破して了ふ様な、市街の爆破を充分に行ひ得ず、此の市街戦を徒に永引かせる結果となつた事である。

○頼晴屋の詩幅を流
くし来る未生こもあ
松前こたすし日の心と
るくも、す、あ左

風北秋洋白如紅、清こゆ月動連橋共
君痛紙攝物酒、不行今宵在北海
松前林夜似山田三以 晴屋

○歲晚の裡の光も付くを今朝大隈家の別邸を
訪めて熊子刀身を幼の頃の如く大さく、

る。道々目も耳も不自由とありて語るも、人の夢野が
ある。大分世の中、面倒なことがあつた。四の字大書もあ
つた。私ハ目も耳も遠くつて、自分も枝も暗
さぬ。器平とあつた。その挨拶があつた。いづつや自
分が尾寺東慶寺の話を思ひ出されて、受けが極
公のあの寺の秋夜、ゆりてをうむす。惜しいことだす
ぬ。世話を保護する。修道院式の寺が一ツ位あつて
おしいと思ひます。刀自のおき境(馬)の人を
見ることをたぐらう。無記もあるやうな気が
した。大隈侯の築山泊時代の話が出た。口を括弧の漆
黒高木屋の巻紙の裏、大隈家の南時を知つ
てゐる。推一の婦人が南平八十一年と云ふが、中江

橋原製

洗の裏が井上三枝に時々のことを記して、まへに
る。其の洗いの内、中江か井上を訪ふて来た時、お夫
人がお夫と通ふこと、間が悪いといふことと思つて、
お夫人を庭から連れ出し、遇はせようといふと、系
を穿へた。話をうんた。古田の病状、靴の袋もあつ
た。この近状を語つた所、強い洋酒や眠薬の有言
であつた。こゝろが泣きとらつて、刀自も睡眠を得な
い時、三杯位日本酒をひつらけ、と極秘を洩さんだ。
自分も笑を穿へて、もう日本酒を私の日常の薬だ
と笑ふ。拙すよ、其の晩を毎晩おやりするといふ
我田のおおと引いた。世がそんなことをして、おあ
いびきとらうと笑ふ。刀自の相南酒量あつた

元(元)の件は此の如く：行々父母：處を道と悦はんは中
子志親を刺殺すことも大切と云はんは、流石に親
しい自分信と云ふ笑へて毎を此の如く自分を刺殺し
て困りまふと云ふは。多しと姑くし、神が二匹の中
に入り来り、光い志きり、玩んじ時を移し、漸く解し
去つは。毎分母も唇を、菓子を持来す。ふ例は
此の如く、菓子の外大奉書ある故一ノを呈し、
(十二月五日記)

○思代、元が良寛と山陽との似寄りの點を誤會し
て論文と考へ、りき、あつたの助言を、一席七、
此の如く、友人の任歴を、あつた、

一 貞寛の玉峰、○的を、一寛、七年、山陽



年十六才也

- 一 文化元年、寛五合席、定任、此年山陽廿五、謹慎
を許さん、大の、驥道を伸す、股あふを、三つ
- 一 文化十三、良寛、五合席と、出む山下乙子、後、
此年山陽廿七、父事、あつた、表、贈す
- 一 文政九年、良寛、夫を、先、木村の、宿と、
此年山陽四十七、外史を、求め、
- 一 天保二年、良寛、入、此年山陽五十二、棄、
の、前年、心、を、流、き、修、史、論、策、方、
也、

如斯く、ある年譜：記し、比較し、見ると、その、
功、合、も、と、未、あ、が、ま、い、し、る、良、寛、の、異、師、行、脚、

を畢つて卯未に定住の時が山陽の樞密生活と免ぬれば時
がある、良寛入寂の時が山陽の古葉の大成の時である。良
寛の入寂の良寛終りの大國圓と見るべきであらう。
○放屁のことを改氣と云ふは、轉矢氣と云ふ。矢は
屎と同じく、氣を矢する者、屁乃矢の氣を云ふ、矢
氣の外に漏るるを内轉矢するを轉矢氣と云ふ
快に屁かゝりと云ふと、仍るまゝの屁と云ふは、聲耳を
抑ゆるのみ、矢はりする也、轉矢氣の標を云ふは、
殺すも、元の持田子か山陽の遺著に三本親馬年
七歳、妹也、市中、以、端、詩、自、命、或、我、令、孫、轉、矢、氣、
云、祝、之、不、見、名、曰、希、轉、之、不、笑、名、曰、夫、不、當、若、自、
女、口、出、人、皆、掩、口、鼻、而、過、之、と、ん、ん、ん、ん、す、か、い、屁、を、

標原製

才ハし屁云ハ、改氣と云ふし、轉矢氣ハ、矢氣、肛門に
通り、外に漏るる、轉矢氣、即ち、希、轉、之、不、笑、名、曰、夫、不、當、若、自、
女、口、出、人、皆、掩、口、鼻、而、過、之、と、ん、ん、ん、ん、す、か、い、屁、を、

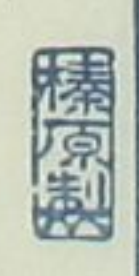
○新編の名山圖今六冊 珍籍といふは、上本が
つ比の、愛い、つ比、若不同今、い、谷地、い、ろ、く、い、ふ、か、林、ふ、を、
ま、こ、い、比、若不同今、い、こん、比、け、い、流、不、れ、京、洛、い、林、ふ、の、淵、
葉、い、全、圖、い、誇、り、得、る、い、の、い、い、京、洛、か、ら、地、方、い、出、ぬ、い、ん、
比、の、い、保、れ、い、ま、い、。京、都、い、皇、后、の、あ、つ、比、け、い、。帝、家、の、遺、
地、い、少、い、い、ま、い、。寺、社、の、由、緒、の、あ、つ、所、い、教、い、ん、ら、い、程、多、
く、あ、つ、い、ま、い、ボ、も、い、時、名、園、い、附、居、い、て、あ、つ、。由、來、京、都、の、
山、川、の、自、ん、い、美、ら、つ、所、い、あ、つ、い、。園、池、い、極、度、の、技、を、凝、
い、て、あ、つ、い、。作、庭、の、範、い、京、洛、い、い、改、合、い、て、あ、つ、。即、ち

林名不図分、摩訶庭園の園譜である。京都ある内
あり、作らねれば此書の、作庭研究の書として珍重せざるべき
ものあり、此書味を於て永く生命がある。冬不の春
園を如実と穿つれば、他の無いても云へ得る。勿論沓家
が畫したいくのよ、あり、是れ、粗描があつて、此の
園今の如き物細のよ、無い。實、名不図分と云ふ一程の
絵の描し方が行つて、結果の、其境、入つて、どこ、こ、こ、
字實を主として、此、宛から、字、字、と、見、こ、こ、こ、こ、
がある。尚ほ林、を、中心として、祭禮や宴樂、お、戲の
園、を、女、の、趣味を、豊、富、に、した、り、女、の、名、不、図、分
式、の、人物が、多く、あ、り、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、
つ、る、所、に、此、園、分、の、位、打、つ、た、あ、る。恐、く、笑、樂、の、書、と

標原製

一、二、コ、シ、十、五、の、よ、よ、い、無、く、自、分、の、名、不、図、分、が、少、年
から、好、ま、れ、盛、に、集、め、た、ゆ、に、散、り、つ、た、園、分、の、中、心、を
七、喜、こ、ぶ、よ、い、此、の、如、く、園、分、の、中、心、を、此、の、定、取、十、一
年、一、手、安、秋、里、離、吟、と、作、り、出、た、り、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、
法、橋、休、文、問、草、傳、法、橋、西、村、中、和、奥、文、鳴、海、文、章
の、三、人、が、分、擔、し、て、書、いた、り、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、
の、心、を、擔、が、分、る、編、者、の、任、務、を、求、め、入、り、難、い、事、を
画、手、を、付、け、て、描、き、上、り、其、の、解、説、を、書、く、ら、り、
日、思、が、折、れ、た、り、相、違、う、い、と、思、い、ん、る。江、戸、名、不、図、分、の
位、位、の、文、を、あ、ら、り、書、き、あ、ら、り、と、西、琴、が、その、如、く、こ、こ、
文、を、あ、ら、り、價、が、あ、ら、り、の、如、く、
〇、庭、の、名、不、図、分、の、如、く、と、云、ふ、云、く、庭、の、名、不、図、分、と、

病を治さるるは多し云々或は云く醫の衣さる
衣は美らるるせん人軒人云く醫の風さるる風
儀は多く病を制す云く醫の異さる異言異体
能く用心する云く醫の動やすん人をも
疾ふ田舎仲宜の東歸子云く日かくも云く醫の
稲者よく尾を出さる人も誰かまると好矣
○或は流行せし江戸時代のこと前書も亦て
泰山の蜘蛛の吐きとるる云々或は風邪を
行の御家の家ヲ病まざる云々或は戸を閉
家の内を閉るる云々お休んを札を焼くも家本
又くはとある云々取中何侯の雨の供主城の人長
不苦と令とある云々程さるる事と深せ又の



へい

○病醫を救難といふは此に杜尚を芋壠と云ふこと
まつき中山三柳の徒湖地兼云々
山の芋を掘る冬に枯れて見えぬ出たと掘り
あせりてい得へかゝる芋の枯れたる芋を掘り
出し、女もぢをぬかへて入心掘り得る也無智を
其の傍を佛性の性と言ふ元々も女偏るん心
どちいせぬもの玉風ばかりするらん能き河近
の女とも儲きを後任とさるぬん心先任の甘受を
笑ふいと此極儀のすんさふいはん也
とい説き得る也

○金沢文庫の書(カサガワ)と呼んぬみか子

ガワと呼ぶべしとい文彦 長閑詩は左の如く云ふ
 居る

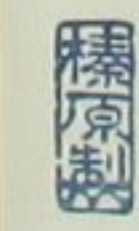
を認めて貰ひたい。
 最後に金澤の呼稱法に就て一言する。現在一般からは金澤と書いて「かなざわ」と言つてゐるが、古文書を調べて見ると、總て「かねざわ」と呼んでゐる。「かなざわ」と呼んだ例は一つも見當らない。徳川の末期でも矢張「かねざわ」と呼んでゐた證據としては廣重の金澤八景の稱名の晩鐘に、

はるけしな山の名におふかね澤の霧よりも
 るゝ入あひのこゑ
 とある。先頃加賀の金澤の呼稱法に就て、金澤市立圖書館長の毎田周治郎氏に調べて貰つたら、金澤市史に『金澤はカナザハと稱ふ此名は庄號に出づ、古は舊金澤城及兼六園等の地方を金澤庄といへりといふ』とあると教へて呉れた。加賀の金澤と區別する上からも武藏の金澤は昔から呼來つたカネサハと呼んで、金澤文庫もカネサハブニコと呼んで貰ひたい。

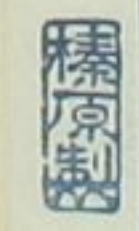
高前田杉屋公が侍従を兼ねる所を
 執り前奉行書に記す所は
 と左の如く、高前田文彦の状が略々此の

とある。次は徳川時代の初期の延寶五年に加賀侯の前田松雲公が、鎌倉地方に侍臣の津田太郎兵衛光吉を遣して、書籍其他を搜索させた事がある。その時の光吉の報告に、
 十五日(延寶五年「三三七」十一月)に先金澤へ飛越稱名寺相尋申候、寺實には御用に可立物無御座候、古之文庫の書の内一切經大般若經百七十箱眞古秘密書唐櫃十一合は佛殿の脇に入置候、其外の外傳の書は俵に取入十餘俵佛殿の天井へ上置申由稱名寺五院の頭一の室物語に御座候、其天井の書共見申由望候へ共、衆僧中へ相談可仕由一の室被申候、其後一の室より返事御座候、稱名寺に五ヶ院御座候、此内二ヶ院は奈良へ學問に參只今留守にて御座候、萬事五ヶ院寄合相談仕候、二院留守の内は見せ申事罷成間敷由返事に御座候、二院院何時奈良より可爲歸寺候哉と相尋候へば、學問に參候故、何時分可爲歸寺候哉知不申由申候、其故金澤に代官北川與左衛門と申者并觀音院出家浪人鈴木六郎兵衛と申者私宿の亭主など願、度々色々所望申遣、私方よりも一の室へ音信など仕、度々罷越懇望仕候、一の室被申候は俵に入置候故、虫も入事外亂雜仕候、箱などに入れて能仕置候へば、爲見しても不苦候へ共、無沙汰なる仕置様に候故、爲見申候も、稱名寺の五院古來より有來候書籍餘無沙汰なる仕置やうと人々批判も迷惑、第一は龜山院勅願寺に候へば、古より有來候古書、一字も脇へ散し申事不罷成候、三十年許以前後藤少三郎所望仕見申由承及候、其後は曾て人に爲見不申候、小田原陣の時分古書共大形失申候云々

○この初年及應義塾
 其分校を京都に設けし
 とある、是れ一書に
 傳へしと云ふが、其の遺蹟
 今京都の市廳のある所
 で、義塾の校友の遺蹟
 を他の日傳ふべきこと
 日誌創立七十五年を機と
 し先以遺蹟の碑を建て
 除幕式を行つたと云ふは
 表に早稲田の校友の
 傲ふて、東山の將軍塚



附山と大隈侯登山の記念碑を建てんと今世
畫中の學校一碑一文を撰ばんことを頼んじ未
ルのが、田中侯長も自分にお疾があつた。あの登
山の時、几處行し、この自分、確かの内、次、田中、
侯、あつたと思ふ、京都、三井系の中井三郎兵衛と系
人が、東山を京都の公園、一といと任畫し、是、大隈侯
三、文、地を、元、くんと、清、求、し、れ、の、侯、侯、流、し、て、登、山、さ、
ん、の、い、ま、あ、る、其、際、京、都、實、業、界、の、有、力、者、三、四、十、若、い、皆
徒、歩、り、て、隨、伴、し、た。侯、大、日、堂、中、井、の、成、功、を、祈、り
と、ま、ふ、し、仲、を、拜、し、神、籤、を、引、かん、た、こ、と、を、い、ふ、余、が
大隈侯一行、の、難、を、も、た、る、在、山、の、木、戸、押、入、る、の
の、詩、碑、も、あ、る、か、ら、大隈侯登山碑、七、あ、つ、て、よ、い、

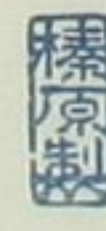


書一、譯記

十二月七日記

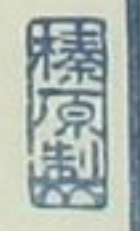
○雪、稀、考、後、知、る、人、の、可、人、也、田、善、次、中、宅、三、寄、り
合、つ、て、多、の、の、お、疾、を、遂、げ、た、書、史、考、今、の、善、本、影
譜、を、出、し、と、い、ふ、い、傲、つ、た、後、本、も、い、つ、た、軟、公、本、の
標、本、を、増、刊、し、し、と、の、あ、田、の、提、議、を、可、し、し、未、嘗
と、し、出、す、こ、と、を、い、ふ、也、然、る、に、石、刻、松、太、印、が、大、改、し、
り、上、京、し、て、果、編、回、心、軟、文、考、の、論、義、と、撰、高、す、る、こ
と、を、い、ふ、也、石、刻、に、解、説、を、書、か、せ、る、事、も、影、譜
ハ、一、輯、十、枚、コ、ロ、タイ、プ、に、附、し、た、こ、の、解、説、共、二十、
枚、一、冊、の、價、を、考、へ、る、こ、と、影、譜、の、収、入、を、い、ふ、
珍、本、を、考、へ、に、取、ら、ず、十、枚、の、内、七、枚、位、を、甘、い、こ、の
と、す、る、こ、と、例、へ、い、黄、毛、紙、合、善、本、復、本、を、い、ふ、

つとをんと離婚したことが評判のよから原因が本音がいまだ
知らず—事實より、フエ子ロサが日本滞在中^女意を集める
資に窮し、当時日本に未だ病りしウエゲローと妻とを欲
関係を結びせ、まんが彼女を得たと云ふことである。所謂
ツ、持てを老つたかあるが、何の關係の支物間、面白
さる處内をなす、フエ子ロサが左左に立き、夕イロスト
と通すると、こゝの女の嫉妬の爲め離婚の訴訟を起し
まんが誹訴と云ふ、フエ子ロサは未だある産を元り上げ
え未嫁と云ふれと云ふ。日本をも持てつれ多くの書物
ハ其の~~中~~邦人の買上げん、まんがポストン、~~物~~物跋、
客路さんだが、フエ子ロサの若七附いた客路があつたのを、
不評判のやゝる名、ハ除かれと云ふ。当時此を可なり



ル有賀長雄、フエ子ロサの名をねすべしと云何ボラの運動
をたまにとりたが、何のこともなすべし、フエ子ロサの隠れたる
名も暴露あり、危険もあるかと云ふて書きたる有賀の
志をとりたことがある、と云へたが、あまののことである。
此へ田中正平、友人の援助を乞ふの席上、演説を試み、
是れ四十年前の物語、と云う、彼有賀の如き、今エーゲ
ラルガンは現に極端に用ひんと云ふが、田中ハ爾後四十年
間ありて其の政事を云ふ、今ハ此就の場へて達し
せんとも日本の音楽界、未だまんを理解する、と云ふ、或は
田中ハ生前祖國の其の研究、其の統系を表現し得たる、と云
ふ、と悲観し、將來の音楽界ハ、こんど無ん、と云ふ、と云
説し、たが、あつて、と云ふ、三千五千人の大家の、今も、と云ふ、と云

此曲其の記解の爲め大なるホーンとゆる坊へんも此の
 品を添くつことと思ひ別とす。甚以残念なりと概歎し
 此曲に今も楽中の西も能く別流に此品を仿るべ
 しと甲午も交渉セールと云ふが、種々の故障があつ
 て行ひんをもうもその模倣のある。全体此品は常りて徳
 川頼貞に依つて日本に持ち来ん音楽を其の源に比しことか
 らるが、その不完全のよを身うも、今も音楽学校に寄附
 せんとのふが、無用の古物故を愛するにあらざるが、
 此品其の後備の約三萬圓を要するとの事、樂品其
 を振つつけのゆゑに九坪ほどを要するとの事、田中の式十年
 甚以歎し、その事、吾等七此品をわけ得るやうに



すこととあるもその形は成りしと云ふ。田中からみるの従
 前があつて、一回感懐し、此中にも素朴な感じあり。例の楽道の
 如道翁の今般連樂を今日論見中にもあるが、その三千
 人を容るゝことと云ふのは、此中にもあるが、その蓋
 を振へつとべしとの言動も、市上甲午のあの言を宣ふ
 すべしと斡旋する人もあつた。或は實現を見るも、此の
 田中在世中に切めをこころえを實現せしむるといふ
 の實をわかつた

十二月八日記

此夕席次は年齢順とあつて田中が物珍根岸
 の三人を床の間に振ると、自分も座を振ると、
 中他の田中が此へん、若くはと云ふが、かつた。年齢
 若い輩が後だが、甲午が遠くつた。けいこを

盤谷府を去るに可なり速く七といふ所の二内なるを
一此の比が今郵便の自動車に乗ると、洲島の
速力が馳せ一日を達するといふ、旋風の準佛も
式に造ると何等不備のまの代り一泊井土井を徴す
と筋歌の海つてお比。

しや口の首府盤谷府建設を五十年位しか任比の
高とまふが、何れも佛教の流布の因で佛教を離
れんといふ人何れも七後らまのいふがある。首府
も目立つといふ或千の大規模の寺を十二萬の僧侶
の唯比托鉢の日飲食をしてあつた。是だけの事
は必
ゆるが此古人が佛に對する奉仕は盛んか、
ハハ、毎相僧の托鉢を待つて為り、飯が草葎の葉



三盛といふ、是が通説と云ふんてあること、
皆素直の家が佛に當つて奉仕して、
す、
缺か、代り、
宗教、
と云ふ、
僧侶の、
といふ、
ハハ、
教へて、
信の、
信の、

此にある。

十二月九日記

○ある反面的犯罪を其の判するが、あると連坐し、小山
 法相が辭職を申出たと云ふ事、傍くであるが、此等、南
 一とこの近衛文磨の名を以つて此事件を叙し、
 文書と振り時、此の事があるといふ。保の増田義之
 の許へ七郵便のものを配達したるが、一後、其の事
 を得た。もともと山崎首に其の文の字を成宮殿に
 一附し、やうやく、美徳、紙五枚、そのよみひあるが
 一清し、おちりの、先以、白晝銀行を託せ、三番
 的の金を奪つたに、ギヤングの背後より、現任判事の
 あることひあつた。まゝ、尾内判事とあつて、嘗て早大
 子、まゝ、任歴があるといふのである。その判事の下ひあ



る某(名)に、此(事)あり、(必)死念(一)と、共謀(ひ)あること、
 あり、現(在)其(判)事(の)家(宅)を、彼(者)あり、(左)傾(連)と
 指(指)し、(長)る(事)其(判)事(の)家(宅)被(投)る(一)
 萬(圓)の(金)を、隠(匿)して、あ(つ)た、と、ま(あ)ること、ひ(あ)る。尚(ほ)此
 事(件)の(為)め、(中)野(村)に、某(の)家(宅)中、一(年)死(一)と、
 あ(つ)て、ま(あ)る(事)を、死(局)に、嫁(一)と、(中)野(村)を、(勘)査(せ)んと、(金)を、
 (と)り、(書)いて、あ(る)の(か)ど、こ(ま)ま、(本)を、(ひ)あ(る)か、(知)ん(か)、
 元(元)二(角)判(事)と、(新)る(不)審(査)の(事)を、(出)した、(代)の
 大(大)不(不)祥(祥)と、(云)ひ、(得)ぬ、(法)相(の)追(退)と、(い)ふ、
 重(重)大(大)河(河)越(越)い、(女)の(氏)り、(行)く(こ)と、ひ(あ)ら、(う)る、(ま)ま、
 易(易)し、(い)ふ、(事)である。

(百上七)

○宋(元)の(遺)書(を)著(し)て、(自)家(の)任(職)と、(叙)

同いふと思ひておれが、あゝ神々しく異状であった。其の裏
 きん東都の便利をいふは、是れも又それ異状を全しと
 母の遺書に於て、更にその奥の善法の中、その六方陀羅
 尼の異状の事があることか、いふ、便利をいふ被物も
 贈つて来た。いふに就て来た事、いふに、異状がある
 ことか、いふ、鬼角多く被物に、いふに、何人の書に
 述べら、何程か限らぬと、其の他、いふに、断定すること
 早利かあることか、この例に、いふに、近來の人の被物を公開
 することか、厭はぬといふ、道々といふに、いふに、現に、いふに、
 二の世の道々といふ、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、
 深衣物語の河内本と稱する本、守本、いふに、いふに、大坂の平瀬家
 と外、其家、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、



是源氏物語の傳列に此の系統に属するものが二十種
 あることか、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、
 ことか、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、

○昨夜内野殿を、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、
 市に及ん、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、
 江木の殿、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、
 である。いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、
 其れを招つて、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、
 其後のいふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、
 小橋、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、
 年、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、
 其れ、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、

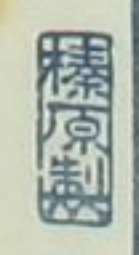
着が起り、医をある洋行することゝするが、その年試か
り、由緒の後、飲としての醜聞係がじまるといふ。冷灰の思
ひ切つて其の爲すは、自らの家の重責を担ふ。其の
家、~~其の~~相、医を任すを飲との交遊を黙許し
れと来が冷灰もさうく人の爲し得ることを考すも、
ある、彼らの冷灰の名があるの七世故のあつた。飲の全
体一は他人の事とさうれ、後、お谷の藝妓と
さうして出の時、江木と落し舞をえれり。此、お谷の別荘、
の置いたりの本宅、四橋をぬき、方便とも家を焚い
れり。此の橋、事もある。飲の持をひり、書をかき、
印を刺し、馬に騎り、剣舞をやる等、往來の通に、
うゝ云ふん、お谷の代心が多い。尤も、長一此の、棒

藤原製

を考ふこととある。此と飲、喜言ある。冷灰の致後、飲の
か、未一人として、愛ふの、此、遠産が、三萬圓外、冷灰が、三井が、
他、財測の、願、測、を、し、測、係、が、十、萬、圓、の、収、入、が、あ、る、と、
ハ、大、切、に、保、存、の、こ、と、を、さ、う、し、て、み、比、の、か、あ、る、と、い、う、使、族、の、飲
り、か、相、坊、の、手、を、出、し、て、志、を、湯、煮、し、た、の、首、七、回、ら
ぬ、境、迄、沈、冷、も、自、殺、を、さ、す、も、つ、た、と、い、ふ、か、此、の、末、路
に、あ、る、冷、灰、の、森、夜、肌、に、金、灰、を、ま、り、粧、着、を、お、汽、車、の、金
幣、を、入、つ、て、七、自、分、の、裁、り、目、も、入、つ、て、み、紙、入、を、ボ、ー、イ、
ン、と、い、ふ、物、を、使、拂、い、せ、し、た、の、人、物、が、家、計、七、無、煩、着、
飲、の、放、縦、を、垂、し、て、あ、つ、た、こ、と、を、い、ふ、ま、ま、い。
江、木、冷、灰、の、兄、か、千、之、七、男、子、が、さ、う、美、ら、子、が、先、に、死
ん、だ、時、異、じ、あ、る、女、が、あ、る、と、い、ふ、人、が、時、異、の、家、庭

どの不幸の思ひあつた、妻の嘗つて見れぬこともあるが、跋むあ
 つた、或は翌年の悪疾が災をさし、此の思ひあるまゝの思ひ、翌
 ハ、悪疾の病ひ死んだ、花柳の病ひ、痼疾があつたといふ
 だ、美由母の誰んか、後妻のものをさす、と翌年、カサカ
 キでタマダと放言し、此と云ふ、或は娘にカサカを移した、此
 情が信す、あつた、此の思ひ、まゝか、と互に感し、此、翌年の春
 母系から美由母をさつて、またこの思ひ、と云ふことだ。

冷灰の燭魔の、評花のある男のあつた、酒田と鶴巻が
 ぬき、毎夜、寝木に入る、さういふ人、運はん、酒、沈酒し
 此、物も七二本づつ、折く、と契し、一本、喫し、終つて、他、と
 を移し、と問ふ、と、契し、終つて、此、彼、の、法、律、を
 孫、の、男、子、橋、際、の、山、田、の、意、又、吉、川、邸、に、あ、つ、た、自



かい、若、國、出、身、者、は、同、家、が、ま、つ、た、の、後、と、此、由、へ、入、り、お
 ぶ、を、ひ、つ、と、み、る、が、江、木、を、さ、つ、孫、に、あ、つ、た、こ、と、二、回、も
 無、つ、た。

〇、高、森、流、主、の、山、陽、邊、の、露、日、匣、面、を、題、し
 と、喘、々、ん、前、月、小、文、を、保、つ、た、こ、と、か、あ、つ、た、一、更、ら
 又、一、幅、の、掛、一、巻、を、托、さん、露、の、匣、面、と、題、し、掲
 げ、ん、と、い、ふ、の、き、た、り、四、句、を、一、行、と、考、え、終、つ、た、

桂之臺、屏、秋、霜、春、暎、紅葉、指、く、杏、花、村、也。

○昨日安田邸：書史学会同人と会し、書物主人より近所の
の圖書を示さる。其日左の如し
十二月十日

一 頼府羣玉 十冊

大内家の大印捺しあり大内系五山版

南藝文庫の印あり日文庫の印あり

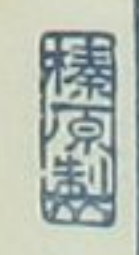
一 古宮本趙注五子 七冊

伊^佐早家の花記あり

一 五子四鈔本 合装之本

将谷振南の初^巻あり巻^目あり

了廣隆寺総持院の印記あり



一 名方類証匡書大全 八冊

大永八年戊子七月 刊

行雲壽桂の刻跋あり宗瑞の刊

了所^りこと跋^りあり

一 三體詩 三冊

旧鈔本 龍公美の題跋

系^列如^根光^明寺^迹河^の著^と傳^ふ

神田香^巖の巻記あり

永享四年壬辰大族林八日合^考字^比異^い

とあり

一 五山版傳左傳 九冊

足利学校齋^巻

と、このから追々高騰の運入向ひつゝ、後前の微粒子の病が伝染し、折角生育した植物を棄て去ることもあるが、今のものは害を除くので、これらも出来ており、且つ亦々種を化することと漸やく害を拂つて貰ふか、今回等々多量としてある。亦々種々の植物を化すること、此の葉のちも大切なることを、更に或る種と或る種を分け合ひ、すこととある。のびあるが、古い実験の凡そを、又か生まつたことと、亦々此葉にも、既知の元なることと、亦々利益も大きくなる。と、(た)多量の絹糸の費、長に押さへておること、云へ、絹糸も上巻とすると、産價は出来あひから生糸並みの前産、清くても些親す、心きむらゐいと、又へ此

十二月十日記

福本教授と於談中、既知を美らふ、亦々の代用をなす植物の何かと尋ねられたら、極と云ふことと、細いもの、と云ふた。山繭と云ふ、よりの葉の、おのの、粗さを、昔のよりの、今と別極がある、尚ほ一つの繭から引き出す糸の長さ、二千三百尺、尺、及び、と云ふ、尚節も、よりの、尋ねて去らるべし、産價は、一千二百萬圓の價を生ずることと云ふ

此部中物及之成と屋指子、更喜華
墨到手飲死如久別在面、草也評轉有
之亦寐莫、子一与物名海一為細論中矣

粗手先し不買約以什のるも、方帳甚之
料四?、こ、の房てとを、産る斗元約、
・杜蒟未の心外、リ、改訂地の者也

十一月二日

承遊を乞

表

外：拙拍一場の不簡執而完之と云ふ事也
梅の香の終る未着松以共無着也而
獲此多謝とて吃恨無字耳、公の共魚
片来然魚味佳從公之談也

端午後二日

通海也投教飲

裏復



頼高の友

○村山秋浦秋山陽の聯落山の一物を齋し未、稀
のる見の珍幅也此物山陽恒博多の豪高(松)
の為りて畫する不首都一待を解し細叙を附す
其得意の心と云んらう、花痴の為り持、念を八ん
るも也、山陽花痴と畫す、花痴盛天峰の画物
を看す山陽元々山陽公物動き遊、刻意を受く
此物謝志を表するの筆心也此談に盛天峰の事
に及ぶ、其故也、而時盛天峰の便或百回、山陽自
家の画を以て之れ日換く、所謂瓦を以て金

と引きつゝ観あるが、今ハ心場の北極盛茂燦の愛に
 式倍す、表意(心)も甚しい、秋浦の詩をよめる
 北極と一百万円と稱し、今ハ三千五百円
 多んとすと、恐らく不審の愛あるを、運の志
 裏と木崎好の巻紙あり、更にも余の上ハ若く是
 若とよふ、全流して未果す、他の巻紙と叙を賤字
 を約すとよふ
 十二月十日記



古老 55
 印仙旭堂翁
 古町八富山 天池
 鏡淵生

新編の人物として世に著せられた
 つた岡田旭堂翁は他門の船政問屋
 前、太兵衛の當主であるが幼よ
 り、書を好んで其道に耽り、家業
 は番附任せといふ風で任職無欲の
 人であった。明治の前此地に遊
 び、其の遊歴、秋葉等の諸家に接し
 又、其の遊歴、秋葉等の諸家に接し
 も消息を通じて大いに研鑽を重ね
 るうち、たゞ「飛鶴堂印譜」が大
 阪に出版されたとき、矢も楯も
 たまらず、時の大金五百圓を投じ
 てこれを購つたのは世人を驚か
 したものであるが、他に宜和印
 史や學山堂や又は印典などの珍籍
 を及ぶ限りは蒐集した。

翁は昭和四年銀行に就任したと
 もあるが、断然決する所あつて之を
 辭し、上京して舊來の知人瀧和亭の
 邸の客となり其の室を對面として
 此君山閣と稱した。瀧氏の紹介も
 あつて瀧方から種々懇囑をうけ得
 意の選筆を揮つたが、折々美術雑誌
 「國華」前報に際し瀧氏に代つて歐
 督の任を託せられ、瀧氏元吉原町
 の假事務所へ日勤し勉勵努力漸く
 第一輯を發行した。この絶筆は我
 國未曾有の偉業を極めた豪華版と
 して、其の内外の好評を博した。大
 第二輯に着手中、突然御堂翁の報
 に接して歸郷、枕の看護數日に
 して御堂は永眠されたので、翌朝を
 待つて再び上京の準備中、病を得
 て翁も亦逝去した。年五十四、多
 年の積蓄を抄割して大いに爲すあ
 らんとする時不歸の人となつたる
 は惜むべき限りである。

其の瀧和亭が翁の遺筆を集め印
 譜作成の計畫あり、印影蒐集を依
 頼されて私も數多く送附したが、
 明治四十年十一月、其十七年忌辰
 に、御高麗賜七氏の書、有志の
 贊助で一碑を西入寺境内に建てた
 碑は紀州の自然石で「印仙旭堂翁
 碑」の六字は直入老人の題する所
 碑陰には翁の遺蹟「不傳今人愛古
 人」の印影を摹し下に四十字の碑
 銘が刻まれてある。
 (註) 飛鶴堂印譜は日本に二部
 を存するのみであるから五百圓
 を投じたのも當然であらう。旭
 堂翁の大田邊の所有となり其後
 東京町田家の蔵する所となつて
 ある。翁の遊歴も多かるが三
 十歳の頃上京の途次、若松に
 飛留中老妓の三味線箱に書かれ
 た二句が残つてゐる。其句に「
 泣少離恨日。笑を苦辛馬。」
 A.V.V

この洞の四階多階の窓より、^噴のき消防のきあきうらみおち
射するも風を遮るんを多く急ぎとらん、^噴のきあきうらみおち
後敵を振ふことくみ見、^噴のきあきうらみおち
用の軍隊出動するも、^噴のきあきうらみおち
元行城屋上へ飛来し救命縄を以て人を見り
上げると未嘗有の運動を為すも、^噴のきあきうらみおち
の為は多く見物も多し、^噴のきあきうらみおち
赴きながら、^噴のきあきうらみおち
多敷と伝ふ、^噴のきあきうらみおち
白木舟を揺る毎に、^噴のきあきうらみおち
雲火と遠見せん、^噴のきあきうらみおち
あきらか、^噴のきあきうらみおち

云ふ事也、^噴のきあきうらみおち
屋上へあつたか、^噴のきあきうらみおち
能の男も女も、^噴のきあきうらみおち
を想像するに、^噴のきあきうらみおち
上へ揃ふに、^噴のきあきうらみおち
ハを数く、^噴のきあきうらみおち
多く入り居ると、^噴のきあきうらみおち
無りしかば、^噴のきあきうらみおち
以下に延焼を免れ、^噴のきあきうらみおち
不立せざるべし、^噴のきあきうらみおち
ハ白木舟と云つても、^噴のきあきうらみおち
不たて割壊の、^噴のきあきうらみおち

日所の建築は元佛法に依りて、デハートのビルデ
ングの末に於ける元佛観則ちくくして、デハートの放
任しあう、全体毎日乳當人と云吐す大建築の川
常時の要する方法が無くとも叶いぬ、是より外部に
非常の様子を築設せしむるにあらう。室の隔離
の障壁を要するにあらう。避難室の特設を要するに
あらう、何れにしろ、燃焼物の取扱も規定を要
するにあらう。然るに或るデハートに、その要する設備
あんとも自本居るに於て、いふまでもなく、おれの
おれの大火災を招いた。其の建築は、非常の様子を
備ふるに、不無なること、勿論だが、店を
七並帯の坊を、要するに、訓練が、無なること、



外圍の多衆を便後するに、坊を、いふ、時、非常
の坊を、便後するに、いふ、應するの練習をなすこと、
て、いふ、非常の様子を、いふ、或千人が、或、七、ある、建
物の様子を一、を、亂さず、順序立つて、降り、
避難の訓練を、いふ、て、いふ、が、若、デハートに、果、て、
亦、亦、いふ、いふ、の、訓練を、いふ、て、いふ、か、今、か、の
災禍に、あ、ら、う、デハートに、あ、ら、う、教、を、録、し、之、に、
録、し、十分の用意が、無、なる、に、あ、ら、う、教、を、録、し、其、他
の、向、に、於、て、も、大、修、法、を、定、む、る、に、大、き、い、留、意、を
要、する、に、あ、ら、う、いふ、に、あ、ら、う、いふ、に、
十二月十七日、文行堂を訪れ、其、一、條、の、經、冊、一
冊、有、條、一、冊、を、購、入、得、り、し、こ、ん、ん、行、堂、を、去、る、に、

十二月十六日記

物の上の二幅は、英家と出づ。短冊幅の
幅は九十一寸、英一柱の款候あり。右幅幅の一
柱分は、七十寸、英一柱の幅あり。家祖一柱分
生と題あり。あるは英家のよきなり。ことを証す。
一條の短冊は、或人を信せしと云ふ。このよき其のつ
け不きべきよきなり。此より一枚とす。

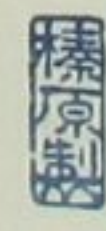
句云く

漁父のつこと笑つて

香

いとく荒我

香と四角す。一條の雅信香の取也。短冊の下
に大至と名を著す。門人書み也。杯中に
一條の遺印。十七顆を拾ふ。一條の印。定て其の



鳥羽に帰し。つととびく。此の十七顆は皆原印の
印影なり。珠とす。

坊間流布の英印譜に、ぬちるもの印の暗模印と
て狩野不庵のよき也。●巻首出すもの一條は、後
余のよき得る一柱の画なり。短冊并に山崎久の
画。皆今も得るものなり。今も唯此の
條の上は、此世の和紙あり。を印譜に、ぬめず云く

英一條七十一寸、短冊

ききら、れうき世の葉の色とす。

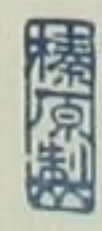
あつとや月のうす墨のやま

此の幅は、北家翁の遺印を捺しあり。短冊幅も
此の祝福とす。可也。二幅併る二十寸也。

○昨日大倉向村の宮景山に依本一幅を齎し来たあり
あり、雨村予と郷園を同ふす、浅井西園の山を以
てしるゝありとせん、北園を以て終り、高山溪谷雪
こぼれんと山下に人家あり、溪流に舟あり、一日の間
に雨を戴き、榊木のの墨淋漓、顔に色あり、
又日上海あ次と歎す、上総あり、心盡し、
か、余日竹の故を以て往々北人の畫を贈り、前月
浅井山ありと贈り、北園墨に比する、色あり
と受ふ、雨村決して意に拙る、書畫界之
に多くの價を附せざる、抑々何ぞ、余雨村の爲め
に一歎を興す。

○その大倉の付の書屋山形成本一冊を譲り来た

○其の直法は、朝鮮の画家趙不琳の双幅を二巻を
来す。其畫一と柳のハ口鳥を寫す。四五年前松地
の有名な画家と云ふ。筆致ある元々、其のま
な、珍として、是れ、此画家の印を換す。名を



錫兵と云ふ。亦松雪後身の印をえる趙氏るるが
如く、如く、その画、中、の題語、ある、其、其、
巧、其、如、斯、く、画、寸、の、題、語、ある、予、の、甚、に
、其、不、云、う、ん、前、掲、余、の、題、せ、る、こと、又、吻、合、す、
、如、斯、ハ、鶴、塗、の、いと、し、帖、を、巧、す、こと、大、う、う、こ
の、習、懐、支、那、の、文人、の、為、も、も、か、す、。 所、ふ、へ、き、也、
○此、著、の、八、雲、の、神、回、日本、を、手、入、ん、今、翻、譯、中、の、あ
、此、著、の、八、雲、の、最終、の、心、が、其、の、去、り、を、あ、る、符、号、を、
、此、遊、て、免、を、見、り、し、没、し、た、と、云、ふ、こと、は、ある、本、書、に、
川、秋、骨、(の、三)、の、概、を、評、さ、ん、前、月、の、出、版、に、係、り、自、介、し、
八、雲、の、日本、を、回、轉、す、る、論、説、を、好、ん、び、讀、ん、で、み、る、が、其、の、人、の
如、き、日本、を、確、定、し、た、外、國、人、か、ら、日本、を、け、て、語、る、の、を、あ、く、こ

とが明く興味深く感ぜらる。此の前後の著述は恐らく
八雲が長い日本研究の集大成にしての如くあらう。彼は
日本の事情として日本の物化し日本婦人と書し、十数年日本
の生活に於ける所見を日本を研究し部分的に考へたよか
少くともいかに各々の階級的に日本をどう考へたよかと日本に
九が種の研究を遂げたとどう考へたよかと日本に
今をどう理解し難いものかといふと告白し、難解と云ふ事
が此著書の冒頭、置かれ、日本に洋書の書物がある
は所謂の歴史、本格的の歴史、絶対、今の存在し
と居らぬと云つておるが、是れ日本を述べたのである言ふ
べきは、科学的に研究するに歴史の無いこと、八雲
の言ふ通りである。日本の事、如何に解り易いもの



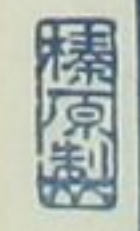
か、就て八雲の次の如く言ふておる

従前以前の私の得た者も良いもの、親しい日本
の友人が、その死の少し前に私に言つたこと、
「此、こんなところ、四五年経つと、貴方が今も日
本人のう解が出来ないとお考へて居るやうに
あるは、その時始めて貴下は日本人に就いて
或分のお解りになる如くせう」と

如何も或る人が云ふは、有り日本の主が外人に不可解と云
へるもの、お考へるは、かく解るは、解るは、不可解を
感ずること、階級の八雲の之れを是と認してある、日本の因
成ある八雲は日本の天地に在りて、何事も悔快は、悔は
まるが、其が天國を去るかの如く、思惟すると告白し

ついでに其の目に觸る事のよくなること其の意があるのやう
か、物作上の多少不可思議を感じてゐるとも、例の
こゝろ、微細な巧み入るを言ひあつて、終つたの如
く云ふのである。

併し、さうさうな経験、決して方算するといふやうな
其表現へは、故にすばからうと、又人を悦ばす
てある。織物も細工の完璧、物象の軽快さ、力
と品位、最少の材料を以て最大の効果を収めんと
するやうにするべからぬ。出来うの限り、簡易な方法
に依つて機械力の目的を達せしめる。審美的價
値あるものとして、不規則たる解するも、一切の
もの、於て及び完全な意味、着色若くは色彩



又或るは、その波の感、すべし、こん等、その
此に藝術及び趣味の多に於けるやうな、
又匠通と巧利(利用厚生)の多に於ける、其の西洋
のこの遠く隔つた文化から、昔のうけんか、さう
あつた、そのうのやを直すと、納得させらるゝ、これ
さういふ、こん等、そのうのやを直すと、納得させらるゝ、これ
其、象牙、古銅の細工、そのやのや、そのやのや、
向に想像力を教習する、そのやのや、そのやのや、
許ある所、そのやのや、そのやのや、そのやのや、
する、そのやのや、そのやのや、そのやのや、
そのやのや、そのやのや、そのやのや、そのやのや、
判する、そのやのや、そのやのや、そのやのや、

三千年前のギリシャ文化を指して不完全と
稱する人々に依るものも不完全と稱せらるる文化の
産物である。

この物質的文化に就て稱揚する所であるが、更に物
神の親も種々の事例を挙げ、稱揚を極めて居
る、終にキリシヤ文の如くと見んとする人は日本を見よと
云ふのである。

ハルハ日本を理解するものは日本の宗教を研究すること
を先要とするとして、^金書をその元と見よ、^追追々
讀むに随つて採ることもあるから、此の書に附
録としてある書屋をぬめらん、ハーバート、スベ
ンサーが日本政府の如く是を文書の如くを著すの

注意を惹く、此書の當つて大隈侯と云へルこ
とがあるが、その全文を見るのは、初めである。此の
手筒ハスベンサーの没後一千九百四年一月十八日
龍動タイムスに掲載されたもの、金子子と共
へルもの、スベンサーはあつかひの他見を傳へ
ることを注意し、死後うまひも表無用と云ふ
もの。全文は長いが、何れも就ても保守なるべしと
極力日本の教へによむる、手紙は長文であるが
らその要を摘録するとたゞしくある。

一日本の採るべき政策は、欧米法を出来る限
り採るべきである、貴族は比して強大
なる存在に而して貴族の位を

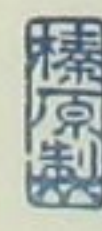
有之候外四の動と能く治り足掛りと共に
せる所の注意すべし

一 貴國の政米法と條約の改正して外四の
本に動して全五を開放する事を提案改定
格の改訂見え候が、此の心を貴國の安
に關するものとて真心に堪へ候一印を

例にふる

一 外四人の土地所有を禁止せしむる事
後等土地の貸與をも拒絕せしむる事一年
契約の借地人とし之の地位をすることとせし
べし

一 政府所有或は政府經營の礦山田の經營を外國



人に出給ふ事

一 貴國の沿岸貿易を常々自國の手に取りて外人の
えり得ずる事を御禁止せしむるべし

一 内か人間の旅行に關する條約を改訂せしむる事
止ありべきこと御注意せしむる事 異種動物の

一 中が或る僅少の程を以て以上は分岐する時、年
月を定る間、其の條約を改訂せしむる事 未だ
の例に人間の旅行に關する條約を改訂せしむる事
貴國が豊産と提供せしむる事

最後云々

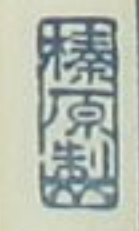
本書の所以に御注意せしむる事 供する為めの
七の事と他見を慎むる事 瀧澤公表の事

と換異之七起歎死、免二角や生存會中はか、
ふり無き換り能も生れ、かく申上候いや生同胞
の悲嘆を惹起するを避け方か故抑存

前記の如く申上候も本筋の進言を伊藤伯より
しも秘密に語らるゝといふ意より勿論無之、せ
は却つて伯が此言を考案せしむ、横合を得ん
ふと勉勵せしむる意あり、抑存

此の進言は日露戦役中が日本が大捷を得れば前
事以上の如く、スペインが日本の如く強國を思ふ、
こと何んを考むるか、吾もきや

ハ云いこん、就て言ふお、日本、此進言を納ん



て何んを考むるか、吾もきや、事、實、政、策、ハ、此、進、言、に
従つてある。日露戦役は日本が勝利を得たこと
をスペインがハ目撃し、其説を羨し
たうのつれが、あううと考めて、ハ云い、産業革命の展
の爲め、保守主義が日本の如く必要ありと
スペインには思はれてゐる。但し次の時代が来れ
ば日本はその保守主義の多くを棄て、七危
険はるゝの如く、保し、現在一時は、日本ハ保守
主義を救済の力と頼まなげん、うううの如
く、あうとも考めてゐる。

(十二月廿一〇記)

○頃日山陽が杉永士登に、出いせ、其つに山あの情を、見れば、
思ひ出したこと、杉永の事がある。此人は、高多の、高、高、高、

旅中筆を掲ぐるに至り、いの死ぬるも合んから、墓標
 日代へるはえり有れば、好く文章報四の前後ひあ
 るか也知ぬぬと云ふて悲愴の筆を揮つてゐる。そ一
 て一首の和歌があらはれてゐる

四の死ん生半惜しきぬ誠を心我を刺すてふ人も
 異世の身はくしく外國の病に臥してゐる、異世をいふを見
 舞ふ為の出づれば、ルカ、意もやうやく病重つて、病
 絶望と報せんとてゐる、老父の心す堪堪、女
 の泪も、病重つてゐる、

三月廿二日記

深淵

微笑みつ、死にたい

せめて祖國の爲めに行かん

『死出の旅路』の内容

中々困難だ、また其上に全國人
 民の多數が歐米大國の眞似を
 して
**國家主義や
 民族主義を**

高調して自ら國境閉鎖の方針
 を取ると同時に他國を刺戟して
 國境閉鎖を執らしめてゐる、毎
 年七八十萬人づゝ増加する人口
 を如何する積りか知らないが、
 現に飽満には生活することの
 出来なくなるやうに自分の方か
 ら仕向けてゐる、練練の籠城!!
 實以て不得策の至りであるが、
 現在では事實上國策の一となつ
 てゐる、何故全世界の土地及物
 資は日光や空気が同じく、人類
 全體の使用に供すべきものであ
 る、と云ふ大義を唱道して大和
 民族を救ふと同時に全世界の人
 類を救ふべき方針を執らないの
 であらうか、これは問題が餘り
 に大き過ぎるが、要するに我等
 の日本人は他國人よりも一層深
 く生活の道を考へなければなら
 ないと同時に、又死の覺悟をも
 して置く必要がある

「談笑死生間」
 と云ふ扁額

を多年の間、書齋に掲げてゐた事
 もあつた、誠によい教訓を與へて
 くれたと今でも尙慈母に感謝して
 ゐる、特に古稀以上の年齢に達し
 た私に取つては生よりも、死の機
 會が一層多い筈だ、今日かうして
 ゐてもいつ何時死ぬか知らない、
 明治廿三年の國會解散から、日清
 戦争の頃、即ち政争の最も激烈で
 あつた頃は、毎朝家を出るに方り
 無事で歸れると豫期して出た事は
 なかつた、今日はその頃とは時勢
 が大いに違ふとはいひながら七十
 を越えた老軀を掲げて海外萬里の
 旅程に上るに方つては「死出の旅
 路」と思つてゐる方が確なやうだ
 現に先年私と同じ頃英國に漫遊し
 た井上勝子爵の如きは私に比すれ
 ば頗る健康な人であつたが、英京
 において客死された

學京翁がロンドンより送つ
 た死出の旅路と題する手記
 の内容は左の通りである

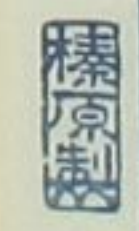
こんな名を付けるのは何だか不祥
 不吉のやうにも見えるが、私は悲
 憤的境地より、かく命名したので
 はない、我が日本は天懸地異が格
 別に多いから何んな時生命を取ら
 れるかも知れない、其の上には有爲
 の人物を××すること

愛國的所業
 と誤解する

所の熱狂者が澤山ある
 明治以降だけでも刺客の手に斃
 れた者の中には大村益次郎、廣
 澤風良、大久保利通、森有造、
 星亨、伊藤博文、原敬、濱口雄
 幸、井上準之助、團琢磨、犬養

毅等の諸君がある
 何れも國家有用の偉材であつて、
 これを××した爲に、國家にどれ
 だけ大損害を與へたか知らない、
 幸ひにして絶命はしなかつたが、
 ××されたもの、中には若
 倉貞親、板垣退助、大隈重信、高
 田早苗等の諸君がある、この外に
 も運動内亂のため非命の死を遂げ
 た者は前原一誠、江藤新平、西郷
 從政、桐野利秋等數へ盡せぬほど
 多い、王政維新以後における帝國
 一流の人物には幾の上で老死した
 ものより非命の死を遂げた者の
 方が多いかも知れない、ゆゑに苟
 くも一流の公人たる自覚のあるも
 のは、極死は素より覺悟の前でな
 ければならぬ
 またその上に人口の割合には地
 面が少いから生きて行く事が、

的の日本の宗教の祖先崇拜のあつて佛教も儒教もその
根本信仰を禪補するやうな利用をせられて決し
て妨害をうけてゐる、溯つて日本の原始的祖先教と
其の変遷を探つて見れば日本の社会の軍隊的利
害をどう考へる、日本人自身は遠傳的の因襲的的
にある程度心得てゐるが七死八活の如きものも分つてゐ
るのだから、唯此祖教以来の習慣は分つてゐる、
と盲従してゐるだけの事だ。若し外人から日本の倫
理や家庭の道徳を問はれたらどう答へようか、
答へるに「成ん」と出来ぬ。日本人として日常茶飯の
事でも外人として理解せしめるのは容易いものゝを
世界に於ける事柄と美つてゐる、とこそ日本の美である



特である。個人主義本位の西洋の家庭の母たるものか
何うして日本の家庭が理解し得らうかと、自分「英文大
日本」を刊行するに、日本の家庭組織を外人の眼
光と試みることがあるが、おおよそ此問題をお説くは難
いもの無いつくしく感して、今も果して考へてゐる。こ
れは日本の家族を説明するもの、祖先崇拜目を研究
してゐる、その考へをせよ、今も考へてゐる、
を考へる。ハ云の此著は日本人が企てた、好果を外人に其
へ得ることも、要領を得ることも、討究してゐる、
し、吾等日本人の此世に於ける此の物化、
詩人の海と海
ハ云と云ふ
十二月廿三日記
〇ういふことだが、日本人の宗教心が無いと、日本人の

これに礼拝する。佛壇の佛の對しては礼拝をするけれども
物故家族の冥福を祈る^{心主}の儀はあつて、クリスト教のごとく
教祖教祖を祭ること、空等に従つてある。是れは祖先
宗神の基に、此の日本固有の宗教を掃蕩して佛教の
利権日本を成すに難いから、日本の信仰を空にせぬやうに
んと接けやうと仕る。但し、是れが空宗を以てよめて
あるから、各家族が佛を^佛拜ふのも祖先を拜ふと同
し精神は佛の力を藉り祖先の冥福を冥ふ本
分である。是れは關係が日本固有の佛教が宗教とあつてお
小の信徒は教多くあつても、根本の祖先宗神教は未
して妨げられぬ。神道の儀宗友儀式をよらうから
とあつて、祖先宗神教の^{心主}とあつてもよらうから。利権

標宗製

祖先教の佛教や儒教に種々彩色されておるけれども
國民的の日本の宗教の祖先教がある。この祖先教は
永續して感する浸潤し、目的は善處にして、^祖祖の^{心主}心主
外に得るものもあつて、人の心を宗友と感^心心
ある。この祖先から靴の是れ、金糸の靴あつたと感^心心
同にやうに、
併し日本固有の祖先宗神教の時々危殆に瀕して、史
かるいから、佛教の日本固有の宗教とあつて、調の令ふや
うに、二風さん^{心主}心主の行いんが、^{心主}心主の増長して
政府の對抗し得るやうに、^{心主}心主の比叡山
を亡ぼして、^{心主}心主の勢力が進入

日公今から考へること、何んが彼れが如く陥没ししか
疑はるべきか。恐らく各地の領主が軍器や
貿易などの賄賂の香餌として、領主先づ改宗
して領民の改宗を勧めたところからあろう。尚ほ
他に身事田畠の種々の儀式といふ佛法に倣つた
からであつたかも知れない。志のし日本の祖先と
對にお容れんといふキリスト教が、どうして日本人
に受け入れられたか。不可解である。支那に於ても
羅馬教の傳道の方難として祖先の祭祀を認め
た時々の禁錮を免れたが、その後羅馬法皇が五
協を催して、その意からいひごとく裏へたと云ふ
日本も斯く妥協を内々してゐたかも知れない。



のいふ如く、陥没と云つてゐるが、左も無んが故か、
陥没するに至つた。保し幸ひのことから、秀支家原
の爲め、此の止めを免れた。先元彼等の横暴跋扈
が自から拒いた事である。彼等の追々暴威を振つ
て佛寺を燒き拂ふの暴をうけた。又布教を以て、徒
らと日本を侵略せんとの野心の包蔵があらう。こ
れは因つて家原系こそ、二世の根本的の剝殺を
めた。この日本國を、宗教を捕獲するの口實と大
切なる政策があつた。祖先を拜する宗教を有する日本
へ、た欺く、道を以てせんがキリキト敷く引入んといふ限ら
ず、天正頃の羅馬教の凡庸の整ひ引入んといふ、尤も
愚かであつた。おもしろい、そのまゝの、おもしろい、

今日のキリスト教の尚播から考へると、どうしてか、思ひの
つれと思ひのふ、其の極多、今の自由のキリスト教をなす
と、其の支るゝこと、多きつて、尚道の全をなすこと、
の比、多し、西洋文化も、今、感んば、多し、キリス
ト教も、多し、吾とあり、天正の二、三、
とあり、今、その六、分、一、位、か、多し、
その祖先礼拝の信念も、多し、
んが日本の國体のや日本の倫理思想、
からみつゝ、あると、
以上の日本固有の宗義、以上のこと、
こともあるが、亦、大い、
國その名、流、其、湖、を、
幕府の代、大い、

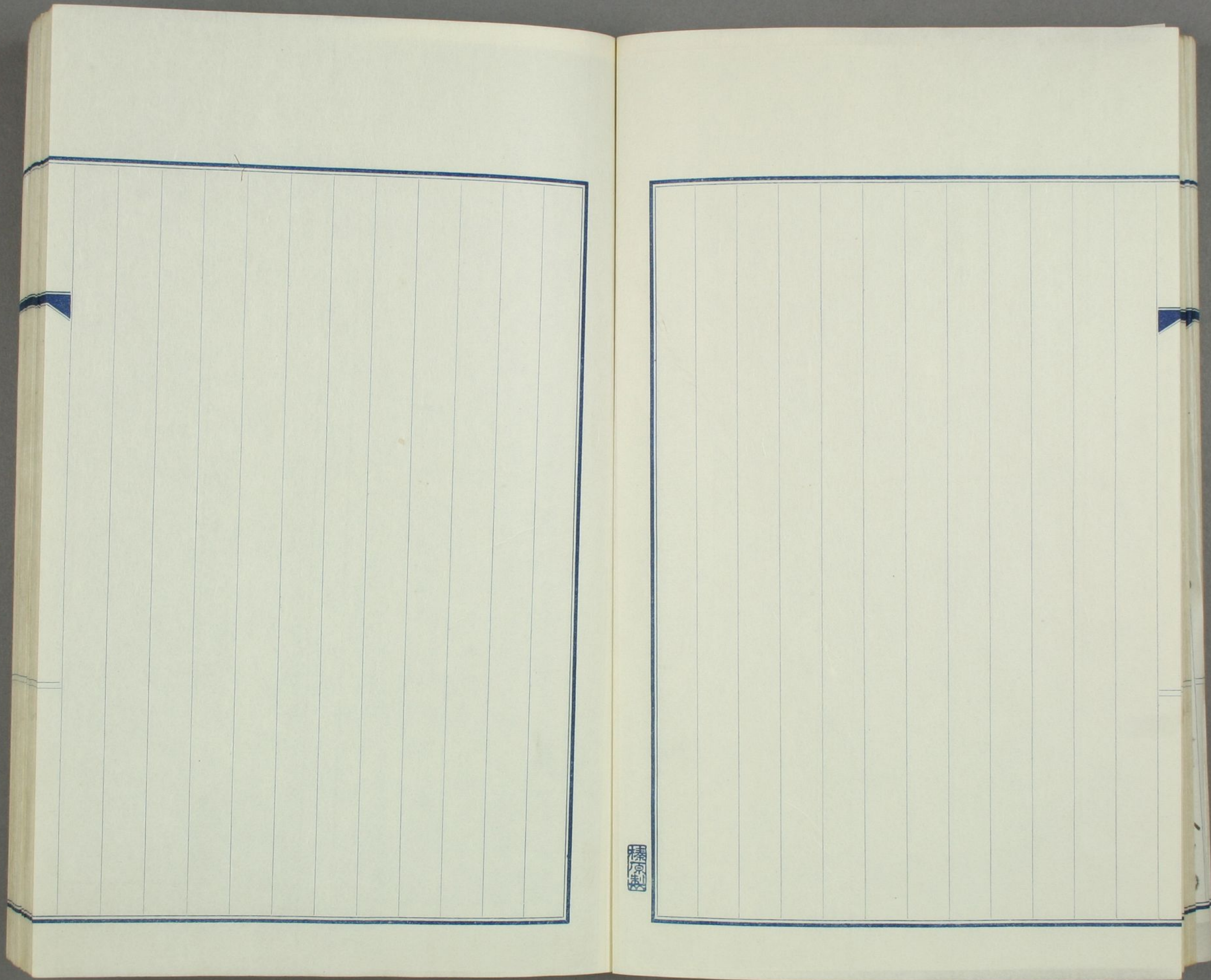
日本書紀

氣を吐いたこと、
治、あ、け、し、の、大、革、命、が、
か、い、根、地、を、
い、
の、も、
か、
と、
君、
於、
す、
と、
い、

か、あましの清き世のむ世界、起成しをぬるもの、今後日本は、どう
進みゆくべきを、せんを保持しむけんか、乃ち日本の
文化に二重の重なるべし。日本式の文化の、世界の文化
を保有しぬ。恐らく此の二重の文化は世界の何れにも
あり得ないもの、之のを保有するもの、世界の冠たるこ
とも得ざる。

先角進歩時代の、盲目的に、新音を求め、為め、改む
べしと、西洋を改むる、舞臺の可きと、美術を棄て
けり、如斯く、窮る危殆ること、進歩の河に、舟を
保持す、意を改むる、日本も、勿論、洋の、先
り、模倣し、あるが、大切ること、流石に、留意し、あつ
例へば、日本の法典、洋法を、編纂する、此が、民法を

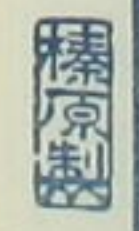
日本の習俗を忘るるべし、即ち、親族、子弟、家
庭の祭祀と根本として、舟楫の祭祀を絶たし、
やうな定めぬこと、ある、亦、大切なる、習俗、觸れぬ
べし、あつて、当然の事、といふ、吾等、之れを、多しとする。夫
て日本の國情、いさゝか、法規や規則、悪令がある。
書生、あつて、洋行するが、往々、西洋の、日本の習
俗を、あつて、置け、翻洋の法規と、此のこと、
あるが、實に、習俗から、未だ、
あつて、習俗、あつて、
之れより、為らぬ、此に、意を、改むる、



任すもの多くは破壊せんは仕業から後世に残る筈か
此の玩具図史にぬれはるる太古の玩具のこととき
多くは古墳から掘り出されたりと云ふか、
果して玩具であるかどうか實に確言しかたし
埴輪をいふごとく、珠を種々のものとし形を造つて
墳墓に入れたものかも知れぬ、此等玩具を
果して見做さず早割であるか、同じ様う
弄いれこれと略々存存し得る、あまの感
古の玩具のゆへ早く虫糸を以つて動物の手足を動かして
得るやうの工夫をせんこと、
して此の如くあること、
文化の程がわらうのである。

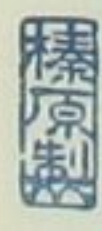
二、
古の玩具のゆへ早く虫糸を以つて動物の手足を動かして
得るやうの工夫をせんこと、
して此の如くあること、
文化の程がわらうのである。

また、また、紙細工である。この種々の家庭人物などもあ
らう。この画も料金を施したものと裁ち切つて、主体的に扱
う。貼りのものも、紙を折りの器などいろいろの形を紙の
中にも、種々の形を心づけて、書体も、映畫も、さまざまの
ま、傍ら心づけて、さまざまにあるが、ぬきよむ。此等のま
は、日本にもあつた。その技巧も、あつた。折紙なども、和入
り、ぬきよむ。得たのである。此の玩具の材料は、價が、さうさう
任便である。試みか、小兒をして、幼い書一と習ひ、ある
ことが、技巧の、を、開く、おもしろい。保し、この、疾、心、こ、理
み、得、た、ま、の、お、もしろい。

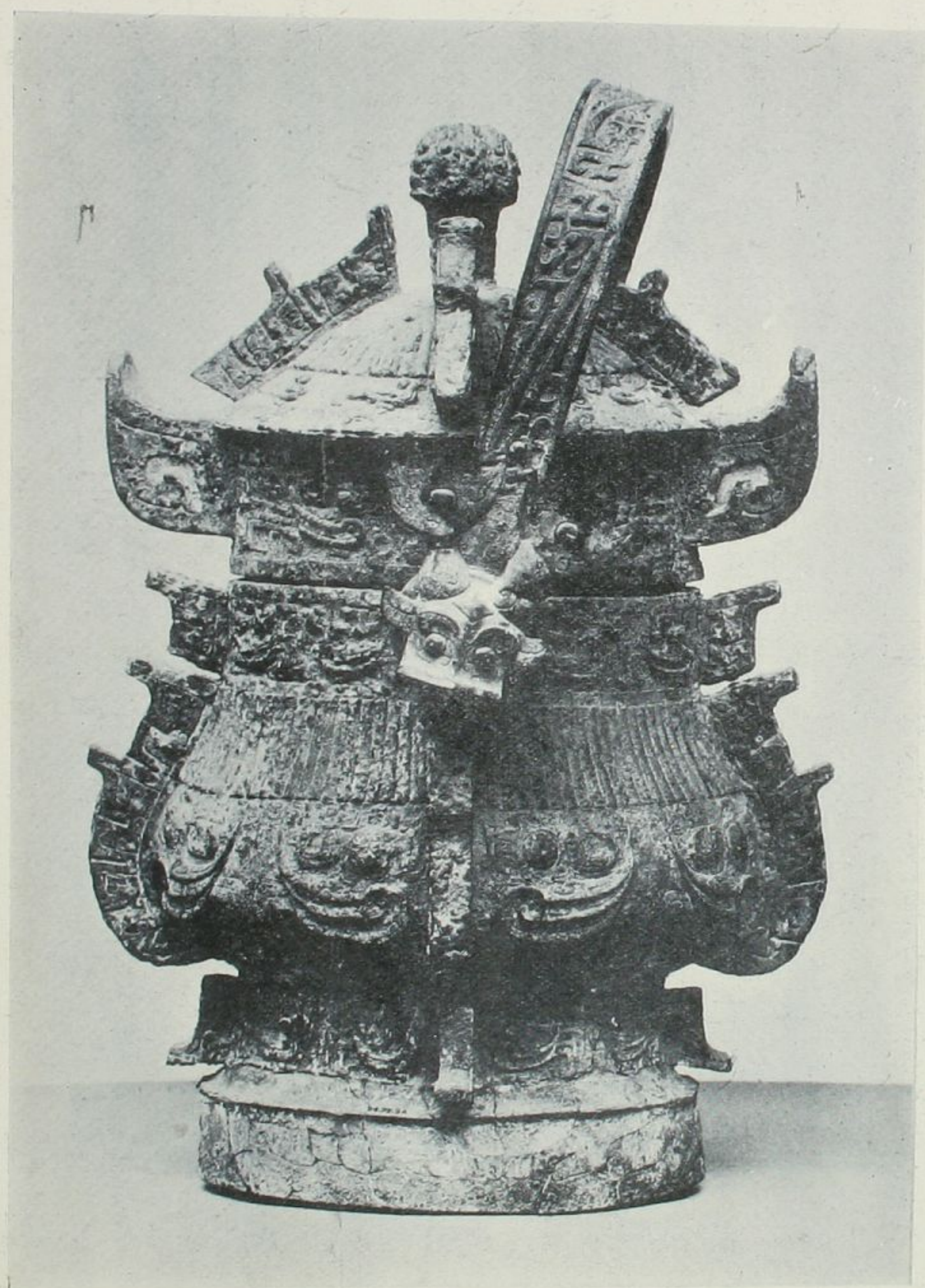


や、将、平、の、玩具、が、ま、た、い、ん、の、佛、の、西、中、の、あ、つ、ま、ん
断、頭、柄、が、玩具、の、心、ん、が、テー、ー、は、愛、児、の、ま、ん、を、得、つ
て、や、つ、ら、祖、母、が、ま、ん、を、見、て、竹、園、や、う、の、よ、い、小、兒、の、ま、ん、が
あ、つ、と、ま、あ、つ、て、小、文、を、云、つ、て、千、紙、の、か、存、り、を、ぬ、る。将、平、の、玩
具、の、大、抵、錫、の、心、ん、ま、ん、が、い、ど、く、各、國、に、ま、ん、の、心、ん、が
あ、つ、る。ま、ん、を、扱、つ、ま、る、今、地、に、中、介、を、す、を、扱、め、ら、る、の、
各、國、も、ま、ん、に、扱、つ、ら、る、故、に、此、の、玩具、を、元、り、金、に、せ、り
交、流、を、擬、し、て、也、**○**寸、の、紙、り、不、す、物、を、さ、く、都、を、か、ら、
つ、れ、と、云、つ、ら、ぬ、る。こ、ん、の、玩具、と、し、て、小、兒、に、弄、ら、る、は、わ、ら、
か、ま、く、扶、幼、演、習、の、者、あ、つ、と、**○**軍、隊、も、用、ひ、ら、る、こ、
の、心、ん、と、云、ふ。こ、ん、を、見、て、**○**遊、程、盛、ん、に、行、ら、ぬ、と、思、へ、る。
此、の、西洋、の、玩具、の、圖、史、と、云、ふ、と、日本、と、格、別、異、つ、れ、と、い、

あるのを認め得る。亦西洋の特長と云ひ得る認め得る
唯此理科学を度同し機械巧を將し此玩具は何人とも
しも西洋が早くから漸けて作る（おも）材料のねむ
日本は其の西洋のあつた（おも）材料のねむ
日本は其の材料（おも）此（おも）ゴムや（おも）
（おも）今この世に西洋と日本の玩具の或人と英を
（おも）日本の玩具が盛ん（おも）輸出する、其の日本人
（おも）の作る玩具の事を（おも）つゝ、其の（おも）を（おも）
（おも）つて（おも）天（おも）の（おも）揮（おも）法（おも）も（おも）ある（おも）位（おも）だ（おも）。
玩具の制作（おも）は（おも）日本が（おも）世界（おも）一（おも）比（おも）と（おも）云（おも）ふ（おも）後（おも）も（おも）ある（おも）が（おも）此（おも）の
玩具（おも）中（おも）を（おも）流（おも）れ（おも）る（おも）多（おも）くの（おも）國（おも）を（おも）又（おも）る（おも）が（おも）或（おも）の（おも）は（おも）
（おも）とも（おも）思（おも）ふ（おも）。此（おも）の（おも）冊（おも）を（おも）考（おも）を（おも）勤（おも）む（おも）兄（おも）も（おも）、一（おも）向（おも）西（おも）洋（おも）玩（おも）具（おも）



が日本に優つてゐる感覚を引き記さる。日本の玩具
の多様多岐なる（おも）此（おも）に（おも）於（おも）て（おも）其（おも）の（おも）物（おも）々（おも）の（おも）精（おも）巧（おも）なる（おも）此（おも）
（おも）に（おも）於（おも）て（おも）亦（おも）其（おも）の（おも）意（おも）匠（おも）の（おも）力（おも）般（おも）なる（おも）此（おも）に（おも）於（おも）て（おも）亦（おも）其（おも）の（おも）精（おも）巧（おも）なる（おも）此（おも）
世界の玩具を歴例する（おも）よ（おも）か（おも）あ（おも）る（おも）や（おも）う（おも）の（おも）思（おも）ふ（おも）、日本（おも）の（おも）
重（おも）三（おも）重（おも）立（おも）の（おも）節（おも）句（おも）は（おも）小（おも）兒（おも）の（おも）為（おも）め（おも）設（おも）け（おも）る（おも）雛（おも）や（おも）此（おも）の（おも）人（おも）
形（おも）が（おも）あ（おも）つ（おも）て（おも）、是（おも）が（おも）為（おも）め（おも）る（おも）玩具（おも）の（おも）二（おも）三（おも）を（おも）製（おも）成（おも）し（おも）大（おも）き（おも）
が（おも）長（おも）を（おも）有（おも）し（おも）た（おも）こと（おも）の（おも）概（おも）が（おも）あ（おも）る（おも）。考（おも）道（おも）を（おも）考（おも）へ（おも）る（おも）よ（おも）か（おも）
小（おも）兒（おも）と（おも）関（おも）係（おも）の（おも）よ（おも）い（おも）もの（おも）あ（おも）る（おも）が（おも）競（おも）馬（おも）考（おも）を（おも）考（おも）へ（おも）る（おも）よ（おも）か（おも）
（おも）さ（おも）ま（おも）く（おも）の（おも）ス（おも）ル（おも）が（おも）あ（おも）つ（おも）て（おも）、騎（おも）馬（おも）の（おも）武（おも）士（おも）が（おも）競（おも）馬（おも）の（おも）状（おも）を（おも）考（おも）へ（おも）
（おも）も（おも）あ（おも）る（おも）、こ（おも）の（おも）ら（おも）道（おも）考（おも）の（おも）よ（おも）い（おも）て（おも）芝（おも）居（おも）が（おも）い（おも）れ（おも）る（おも）所（おも）心（おも）を（おも）
（おも）や（おも）つ（おも）て（おも）同（おも）考（おも）の（おも）優（おも）劣（おも）を（おも）判（おも）する（おも）。是（おも）は（おも）作（おも）用（おも）する（おも）人（おも）形（おも）玩（おも）
（おも）具（おも）の（おも）道（おも）具（おも）の（おも）考（おも）道（おも）考（おも）の（おも）よ（おも）い（おも）を（おも）考（おも）へ（おも）る（おも）事（おも）



犧首飾夔鳳文大卣

紐育
メトロポリタン博物館藏



饗餮文飾及羊形尊

倫敦
ユーモルフオボロス氏藏



漢 異形台博山爐

巴里
ループル
博物館藏



饗
饗
文
久
葬

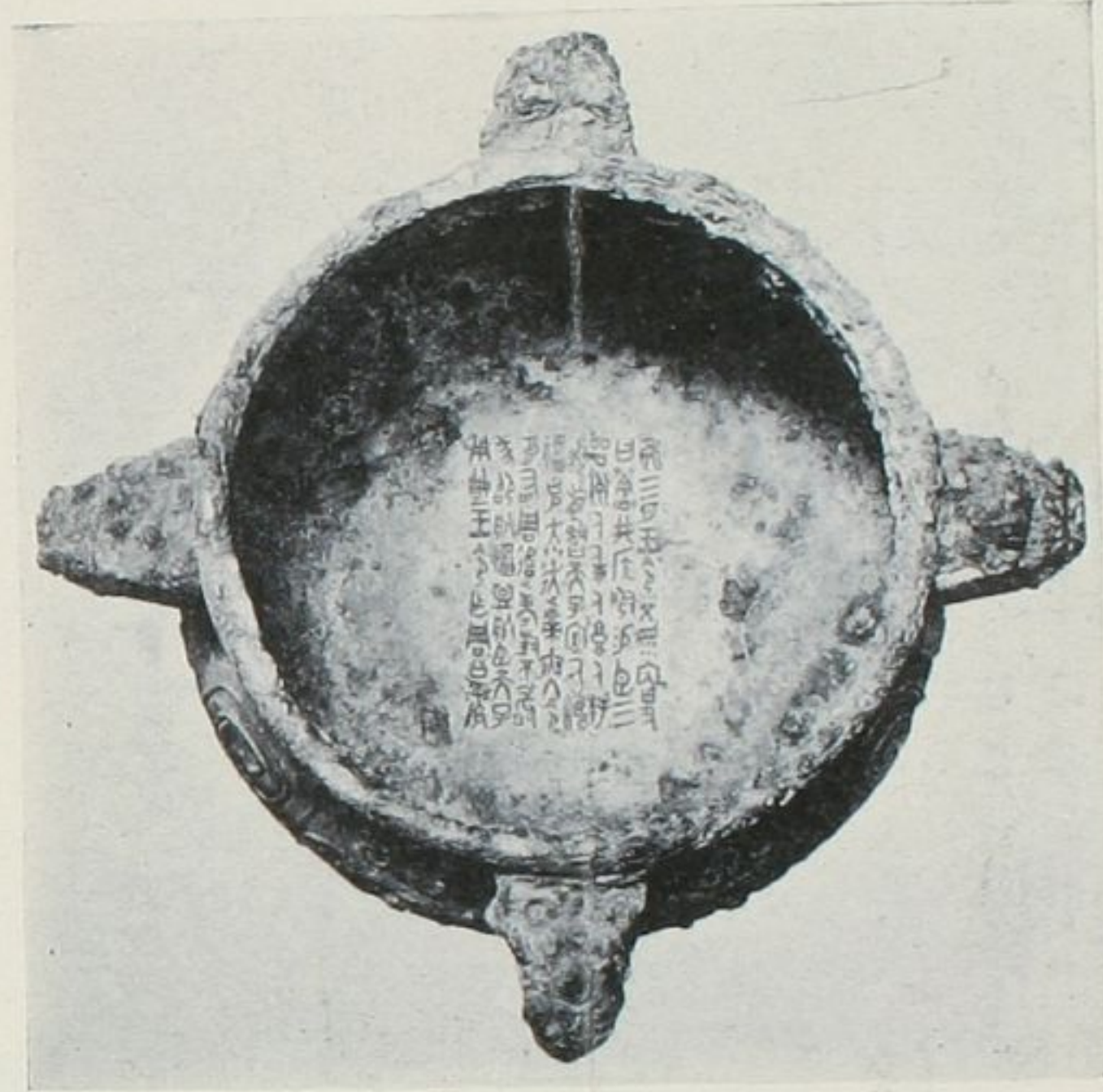
華府
フリア
美術館藏

漢
京
制



蟠螭畫象帶壺

ブラッセル
ストックレー氏藏

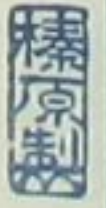


象文周公彝

倫敦
ユーモルフオボロス氏藏

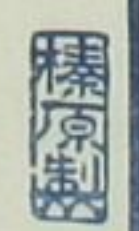


揮毫しておれこと。和鉛を吹くおく持ち来り猪を
煮火して物と一にことひあつた。片方の頼杏坪の聴書
の詩幅かかけんをわね。自らの陳序の十歌と例
のことく程々後詠を交へた。自分、侍前の花瓶と指
ざして、コシナわかんじ異が外人をいふ理解さうい
のい何んの目ひあふらうとそふに。若は杏坪の物
こ就てふおれ、こんが頼家通右の書体ひあふ。どう
も血統の筆ひんさふ。山陽の一家の書体と脱せんとい
めれが、まん、利彦達し得るさうに。書下(十歌)お
し、先んる書とそばんにひあさうか、果して一家
の体と脱せん列と一天地を拓かんに。十歌をへて
ふ、家庭に在つて、どうして、親の体とそふ、一時



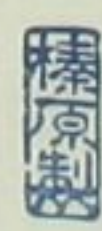
い自分の画か親の画か人々老の難しき首ふるや
であつた。一家の体と脱すること、難いかな。自然に
就て、まんび自から刻苦洗練すこと、その方法
は方法に無いと許つた。十歌、奴力の大切を言ひて
十で十力の天才が、あまの上達しあいの、才と預め所
かあつて奴力が、さうさういからひあると云ふ。まん、就
て自分の言ひ、まん、大家の二代目か、抵ぬ初代、及んま
い、まん、竟、奴力か、初代の如くひあふか、あさう。親
若く玉成すとそふか、都念か、まの時、生れに二代い、あ
まん、比、文藝の上、し、扱を、まん、と、自分、い、話、まん、十
歌の云ふ、い、お、い、其、あ、う、い、自分、の、子、い、家庭、ひ、あ、の
まん、まん、い、か、皆、ふ、画、以、か、の、あ、つ、ひ、世、ま、ま、つ、こと、う、い

七十以上の一年を儲けよとすべし。心中自視の念有き
を得よ。此河野を重んずる心神肉体の健全を乞ふ
ハ生甲斐文がまふ。予ハ幸々一七載を自かろるを乞ふ。久
滞の人と思ふこと。人々々々。此ハ其の元氣也。其
の二字ハ唯禮がまふ。此ハ二字ハ自合の得念とする所が
ある。自合の例も毎年の日誌の終尾ハ一年間の記述の
大要としカビテスレトす。本年の摘注を方りて又ハ
十枚枚に及んび、毎年ハ此とす。記すハ侯がくもあつこ
んて撰つて自合ハ先も一載ハ一年を徒爾に費せしむ
此ことを知り自かろるを強うしめあつ。毎日の漫筆を
自娛をも録と爲し、毎月一冊を書き終るを定課
とし、此冊ハ十二張ハあるハ先毛録ハ自叙を意味



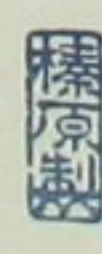
一、歴年の愚録ハ揃へらるるんこと。庶幾一冊
つが果して愚を免んてあつたかどうか。若し免かんぞと
んか。是ハ先毛の叔むるく。強て毎月一冊を方りて定課
かまんと述りしものである。未年の日載難解を惜
陰をもねと題し、先陰を揚ぎ、情ハ賦を重んず
と共に巻り切らるる。二年の古ハ此冊ハ二
十餘冊ハ予ハ隨筆ハ此。この二三年ハ隨筆の
出版を痛恨せしむる。此の年ハ剛を得て其ハ捨教を
をかく。公刊世ハ例も見らるる。思ふ所ある。世ハ
して巻の。この二三年ハ仕事ハ先毛を著る。一法ハ自合
あつ。其味がある。
こゝ一頁ハ予ハ人ハ没し。此人ハ四五あつた。多くの皆ハ自

今よりも若い年齢である。友人が十人許りも毎月紅毛紙
を今何とて怪しむ睦今の今も或人とは数か病人
がある。やうな氣の毒うのりの中風の症、罹つた友人
は植原正直や前島彌三、皆自分からしての道進ん
ないのん、植原の既三年、概し寐て居る、前島の寐て
みこむといふのん、かたや酒席のへびをくするのん、植原
病席の病のう、居る、皆いぬのん、此今も一二方へと
めし出れ来れば、飲る、是来るの、後子び、酒は七勺だけ
許てんとあると云ふ、飲る、飲る、志きうに下相を逸つし、食
り喰らふけいも、一向味がうい、と云ふてある。流石の豪
酒家、七勺の制限を受けし、極、此のぬらしく、不
明の言、終を弄し、不之を云ふてみこ、のい、い、か、ら、い、



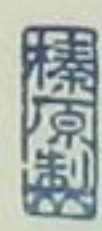
木村徳清、梅方の神は衰弱、罹る、今も三年概
病、年々、あ、か、人、の、過、か、恐、怖、を、惹、き、起、し、流
汗、淋漓、と、我、慄、し、ま、の、を、就、友、と、事、も、訪、問、す、こ
と、が、去、来、多、く、候、也、ある。木村、病、前、日、治、達、を、以、て
さ、へ、は、遠、海、士、の、あ、つ、た、が、遠、石、の、け、に、却、つ、て、病、を、恐
ろ、と、云、つ、て、捕、養、の、法、を、い、い、あ、き、え、る、を、也、や、う、ま、い
す、と、い、ふ、物、の、何、ん、客、も、多、く、す、う、つ、ふ、す、か、無、ん、の、掃、え
し、ま、い、と、云、ふ、こと、也。平生の流儀と云ふて、おの、の、ん
あ、ま、の、の、感、に、打、つ、て、然、る、自、分、と、同、甲、の、高、田、も、峰、も
神、經、衰、弱、を、罹、つ、て、此、以、衰、弱、を、来、し、と、云、つ、時、に、眩
暈、を、生、ず、る、こと、が、ある、が、こ、の、子、困、り、よ、う、に、老、齡、日、の
病、に、附、き、よ、の、い、ち、あ、ら、は、い、な、い、中、に、廿、神、經、衰、弱、を、罹、り

人間がな殺しうさるるにや悲愴である。自命が他原に
あるの引き較べてもさういふ日付に依るもの 十月三十日
○西村文則とよふ人の古い近刊の酒譜を新編して
此人酒徒であるがけりし酒の道にのみある。それだけ自
分から抗議を言ふこともさうけいふ異論を唱へることもある。
酒の嗜むが同じ程にありんか、よく彼女の言ふことが同
じことと、自命も感心する。死うう自命の云ふこととさうい
を考へておのひ、金巻後み終つても一巻の終、留まらな
かるい。此書中は何故上戸の持たざるを附けぬ、この
二即がある。さういふ小本に異論があるが、自命もよく此
が人々判のういことがあるから、試を考へて見る。
此部が習候い人を御容及する時のある、取酒を言ふと



ものと飲無を言ふといふの取。飲を辭しうい下戸が此
のあふと敢て新編さういふ酒を藉くも衆を為すの
ゆをさういふも、實の飲食無の徳を為すか主である
東刺の本も判のういから、今こそ酒が大の改
良である。酒税の關係から酒價も昔一々十倍するもの
ある。斯くういも又んが酒の人もなく主体とも見らるるの
がある。恰も西洋の衆を為す酒を主とするといふ。未
かし酒の改良前の酒質も悪く、又價も飲る廉が、實
の酒を密らるの本体とする。日本の空穿り不似合のういあ
つた。酒の料理のつき、さういふ、衆を為す主人も飲る、こ
注目を拂く、酒の唯れ多量に飲ませんが可からう
と、實の重きを回携うるかつた時代がある。今こそ漸

やく粗酒呈上と云ふ辭令が眞實と云うて未だのむ自分
のやうな飲徒の酒を本休と云う興有左を喜ぶよめあ
る。既に酒がまじがあるうゑに食饌の二の次むもうしい。志
か實際に粗を扱きな成すよめの上戸のふも限らぬい
上戸と云ふも志きらぬ若者も動かすよめがあるからお南
公饌に志を拂へぬらんが自分も酒から
●勲章を貰つてもよめ位酒を忠即びあつて酒の
前も何物をも拒絶する。若い時分美人と酒を並べ
て何んを云ふと云ふんは時えん、いつも美人を割愛して
有方併せ得んは尚ほ可うむびあるらん人柄だが何んか一
つとあるは躊躇ろく酒を左袒した。美人の愛を割
く程であるから料理の割愛するもの勿論のことい



ある場へも此の執着が強い。料理の補助を得て酒を
飲ちつて純き酒家といふさい換へんは酒に忠する
である。自分の人の愛を共に共つて折向主人の心算の食
饌を全く割印して、美人の原を動かして酒をいとおふ
ことか度々ある。自分の若者を着けたよめは僅かに塩辛
着けりよめは準すよめと吸物を一口二三口吸ひ位
の酒を飲ちかからいつ七自分の腰部まで何から何まで
蓋を捲かしてまき主派の手づかすに残る今も若者の
不用の直かいが、多い代り杯の運動が頻あつた。何
故に自分の食饌を割印するかと云ふは理由は簡單
である。下物と酒を重きを置くからである。酒を容り
へき腰帯に他のよめは後すを飲しよめかからである。酒を

中井敬所



濱村大解



徐星州

金子養香



吳昌碩



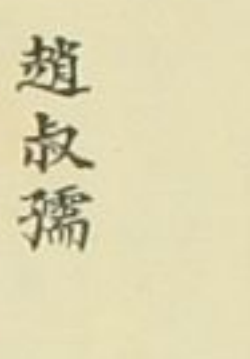
吳昌碩



羅振玉



金子養香



趙叔孺



伊墨卿

先生の壯年時の別號には今日餘り人に知られて居らぬものが二三ある。それ等を通じて考へても先生の趣味や心境の推移を窺ひ知ることが出来る。例へば明治十五年頃から以降廿年間位の間に使用せられたものではあるまいかと想像さるゝ印に古川鏡舛の刻した鏡圃處士と云ふのがある。抱石齋と云ふのがある。如何にも當時の先生が惚ぼるゝ思ひがする。其後に至つて古劍堂と云ふ中井敬所刻の印があるが、先生が刀劍に熱中して居られた頃の形身だと思ふ。それから更に降つて大正の初めに吳昌碩の手になつた寶蘭亭齋主人と云ふ印がある。この別號は其印の側刻に「木堂先生得定武本蘭亭因名其齋癸丑涂月吳昌碩並記」とある通り、先生が第一革命に渡支された時に、定武蘭亭を得られて號されたものであることは云ふまでもない。かうしたことは支那人の中にはよくあることで、二金唾堂印譜の中にも寶董室と云ふ印の側刻に「北苑江南半幅希世珍也近爲均初所得又夏山圖卷兩美必合千古爲對爰刻寶董室印 无悶」とある。共に藝苑の佳話と云ふべきであらう。

白林遷叟の白林と云ふのは無論白林莊のことで、先生が一時政界を退かれた時に、白林遷叟と云ふ印を用ひられたのであるが、其以前に嶽麓洞主と云ふ印を用ひられたこともある。今遺印中に吳石濤の手になつた印がそれを記念して

居る。尙ほこの外に四谷の邸を借翠廬と命名せられて居たがその印文のある印が遺印中には見當らない。

先生の趣味や心境の推移を語るにこれを關防印の用語からも見ることが出来る。即ち先生壯年時所用の關防印には古川鏡舛刻の「任重而道遠」金子養香刻の「我獨醒」濱村藏六刻の「平生一片心」などを見るが、先生晩年所用のものにはさうしたものはなく、例へば吳昌碩刻の「從心所欲」徐星州刻の「坦蕩々々」羅振玉刻の「墨緣」趙叔孺刻の「墨戲」或は又古印では伊墨卿作の「率真」趙次閑作の「塗雅」徐三庚作の「博笑」など云ふ如何にも角のとれた圓滿な語が見えて、圓熟した先生の書を語つて居るかの觀がする。これを又所用の印材から見ても一見うなづかれるものがある。壯年時先生の東奔西走の間常に先生の行李の中にあつた印と云ふのは木の子母印で、さうして多く大印が使用されて居るやうである。晩年先生の愛用された印の多くは田黃、魚腦、高山、芙蓉、鷄血等の諸石で多くは一寸以内の小印である。これを作者よりするも、壯年時代は成瀬小谿金子養香、古川鏡舛、濱村藏六、中井敬所等々であり、晩年は吳昌碩、徐星州、童大年、趙叔孺、王冰鏡等々である。世に印を愛し、印を藏する人も決して尠くないが、先生の如く其年代によつて其所用の印が違ひ、さうして其印によつてするも趣味の進展を明瞭に語るものは尠ないと思ふ。

私は最後に先生の遺印中から其作者別をあげてこの項を終らうと思ふ。

壽	劉	李	張	童	趙	吳	徐	徐	趙	無	山	岡	石	中	中	益	古	成
紀	尹	瑞	大	年	孺	潛	州	庚	閑	古	內	郵	井	道	井	田	川	瀨
文	桑	芝	年	孺	潛	州	庚	閑	閑	閑	敬	槐	雙	對	香	香	小	小
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆
拙	心	王	羅	胡	王	吳	王	汪	伊	奧	足	柴	佐	河	濱	金	濱	
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆
刻	泉	雁	玉	齋	庵	龜	鏡	碩	谷	卿	亭	村	陽	禪	廬	六	大	
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆	顆

羅振玉の刻印である。人として珍らしいのみならず、所用の印材が伊墨卿のは白高山であり、羅振玉のは田黄で共に優良の逸品である。刻として吳昌碩の壯年時の作で、藝華亭長と云ふ印が一顆あるが、これは吳昌碩を研究する爲めには是非一見する價のあるもので、晩年古茂渾樸なる吳昌碩の印風はさうした過去のあつたことによつて始めて生れたものであることを語つて居る。印として傑出した出來榮えのものは吳昌碩の朱文の長方形の木堂、徐星州の方一寸の白文の犬養毅印などをあげたい。紀念すべきものとしては木堂祕笈「朱文印」とある濱村大澤の印であらう。側刻に五世藏六が「藏六居四世蘆山濱村大澤字觀侯爲木堂犬養先生篆々成罹病而歿于時明治廿有八乙未歲春二月廿四日之曉也 孤橋豫識……」と款して居る通り、これは大澤の絶筆とも云ふべきものである。

萬葉新史實

萬葉集傳來史を語る資料

佐佐木信綱

萬葉集傳來史における新たな資料を最近に知ることを得て、自分の心は喜に充たされてをる。今その新資料について記さうとおもふ。

寺院は、古來より國文學書にとつて寶庫といふべき所であつた。萬葉集も、雲居寺、曼殊院、光明寺、金藏寺、寶生院等に、かつて藏せられてゐたことが傳はつてゐる。西本願寺には、有名な三十六人集を始め、熊野懷紙、廣澤切等、尙藏するところ少なくないのであるが、萬葉集も同寺にあつた緣故に、西本願寺本萬葉集と名づけてゐる本がある。この本は一部二十卷の完本で、鎌倉時代の學僧仙覺が諸本によつて校訂を加へた文永三年本であり、古訓と新訓とを區別した墨朱書三種の訓をそのまゝ傳へ、かつ完本として現存せる最古の寫本であつて、その學問上の價値は莫大なものであるが、その傳來については、従來西本願寺に藏せられてゐたことの外、何事も知られなかつた。

記事のあつたのを放せうしておくられた。即ち音信日記、天文十一年十月二十六日の條に「從祭儀、御本力、萬葉集一部、以廣橋拜領之」といふ文があつて、その萬葉集とある層に添書して、自鹿苑院殿進上之由候と注を加へてある。即ち天文十一年十月に、證如上人が、時の帝後奈良天皇より、廣橋兼秀の手を経て萬葉集一部を拜領したのであつて、その萬葉集は、鹿苑院足利義滿が、かつて皇室に獻上した品なるよしの文意である。しかして西本願寺には、他に、義滿以前の書寫にかかる萬葉集の所傳のあることを聞かぬから、かの鎌倉末期の古せう本なる西本願寺萬葉集が、天文に拜領した品であると推定しても差支なからうと思ふ。

なほ證如上人の天文日記には、天文八年九月二十七日の條に、從祭儀、御本力、萬葉集一部、以廣橋拜領之、とあつて、かの三十六人集を拜領してゐる。上人については、本願寺通記に、天文五年二月行經昨禮、大内義隆供其費、而不足、上人又補之、大禮周備とある。その他朝廷に盡しまつる事が多かつたので、度々恩賜を蒙うしたと思はれる。また同九年八月五日の條に、門跡へ萬葉集八卷並注尺五册以佛生返獻之候、萬葉兩度ニ悉令返上とあつて、青蓮院門跡兼法親王へ、拜借の萬葉集並に註釋をお返し申あげてゐる。これによつて、上人が萬葉集に志があつたことが知られる。その他日記中に、愚問賢註、伊勢物語のことも見えてをる。自分は、萬葉集史上貴重な西本願寺本萬葉集を印行して不朽に傳ふべくひたすら盡すものとしてゐるのであるが、あたかもこの時に當つて、この本の傳來といふべき新事實を知り得たのは、ひとり自分の喜のみならず、また萬葉集史上の喜である。

廣告



歪頭山人

松崎謙堂所用林下一人の印、今尙其家に存す、銅印かとおもひしに鐵印のよし穆軒君いへり、林下一人の事、市野迷庵舊藏法帖枯樹賦の跋に見えたり。

書枯樹賦墨本後

此帖舊爲藤益道所藏、其後吉篁墩珍藏、篁墩歿後、予以唐詩貫珠全帙、易之於其後人、此明代之佳刻、足以觀其筆法清勁矣、文化丁丑六月望日迷庵居士誌團圓晁无咎所跋枯樹賦、余見之不過三五本、此本爲余所見之冠、余之所藏、比之此本、相去三舍、披齋望之題、余遂初之明年、俊卿傳家事而老、刻一印、曰林下一人余咲曰、子乃一人耶、俊卿怒曰、入林不可無資、子安得占一人乎、余曰、豈無黃獨可劇耶、俊卿語塞、又明年而卿雲謝職而老俊卿曰、此爲二人今始許子三人、余咲曰、今始許三人耶、卿雲大咲、又十年而俊卿歿余與卿雲哭之眞福墓下、又九年而卿雲歿、歿余曰曰俊卿、噫吾今始爲一人耶、獨哭卿雲天龍寺門甚哀、此余三人

も旨く描けしかば、歸郷するや草鞋も解かず、吾家の前も素通りして寂照寺へ御禮に行きし由。大正十年十一月五日山田浦口町二世白水堂主人より承る。

伊勢の三詩僧と稱せられし悟心、書畫も善く、又明人風の印をも刻せり。崎人傳に見えし松本駝堂の肖像幅、今も其後人傳持すとて、青瓢庵主借りて見せられぬ、其贊翁姓松本、號曰駝堂、墓神農氏、多諳醫方、歸命薩埵、持咒年深、遠覓藥草、陟熊野岑、謹獻 有廟、以五葉淺、辱蒙褒賞、再賜白金、曾歸佛乘、參教外禪、數謁梅祖、嗣法法泉、遺書一偈坐脫如眠、若非兜率、在寶池蓮、安永五年丙申冬十一月淨光僧 男元明稽首謹題書 元明とは悟心の名なり、さては悟心は駝堂の悴にてありける、將門果して將を出せるなりけり。

過ぎし大正十一年櫻花さく春、共古先生鹿嶋詣しての話に鹿嶋に傳へる古印は、鐵印にて雞頭鈕、鈕いと小さし文を神ノ田宅印とよみ居れり、要石といふもの舊の礎石なるべし、要石の外に鏡石といふもありて同じものなり現在の神社は元和の造營にて、其以前は二十一年毎に造

交態也、此帖俊卿珍玩、而後人不甚顧惜、竟爲望雲生所獲、生曰此處不可無先生一語、余嘗與二子相對、評隲此帖以劣墨故不敢着一字、今乃信口誦廣蘭生所誦曰、樹猶如此、人何以堪、天保庚子八月廿七、林下一人明復時年七十。

伊勢の小俣護庵は、もと三宅氏（通稱治平、白水堂と號せる古泉家なり）八日市場に住せし折、隣同志にて甚昵



三宅氏質 屋渡世なりしかば 其當用の てがみ三 束あり。 例の尾張

にありし祝世祿も質にとりてありしとぞ、護庵越後へ漫遊して暫くして歸りしに、家の棟朽ち蛇り、高低を生じ護背にも似たりけりとて、護庵と號せしなり、越後にて屏風に畫をたのまれしが圖取りしかね、遂に書を同じ郷なる月僊上人に寄せて大略の圖取を拵へて貰ひ、其屏風

替をせしと聞く、現在の場所を見るに、高丘にて水利あり、恐くは御手洗に近き要石のほとり舊社の迹なるべし、此事神官も然いへり、外に蘇鐵の根本にも同じ石二つほど見かけぬ、要石の四隅にありし末社、むかしありて今は亡し、をしでの社も今は亡し、其をしでは即かの神田宅印のことといへど、神田宅といふ古き語ありや否や云々。

元の至正七年達磨大師碑陰の篆額、初祖達磨大師實跡之記とある文字の形、まことに我足利末の印篆に似たりけり、中にも實字の如き、全く慶長板の千字文を見るが如し、かゝる印篆曾ては日本の印判屋の創意と輕しめしが、やはり淵源する所はありけり。

竹田印譜に、林谷山人近日技大進、刀法嚴正、山陽喜甚、請刻三十六峯外史之玉印、刻竣、改容拜之、の一齣あり、往年某先生これを讀みて失笑、山陽例のお上手なるべし、それでなければ印が解らぬ人なるべしとぞ。

金井烏洲が蒐めし貼こみ帖を見しに、中に林谷の引札あり、

卜居募疏

余頃買下谷練塀小路詩佛翁之
故宅百方酬其價雖然衣箱飯籩
爲之一空無以度日之計故刻一
千印須之知舊以乞禳金

林谷山人細川潔頓首再拜

粗末なる印材に遊語を刻したる林谷の印を折々見る。こ

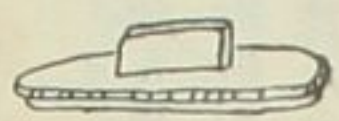


れは林谷常にほり溜め、小さき箕
に入れ、客間へ置き、この印は家
内の帆待にしますとて小錢を以て
來客に賣りつけしもの、由、椿所
君より聞く、又貫名海屋は、十八
九の美しいの置きて、客あしらひ
をさせしと、泰庵君に聞く文人と

て上手に賣らねばなるまじ、

大正十一年五月十九日子刻印人吳石潜歿、名隱、字選
庵一號潜泉、同治六年丁卯六月廿四日戌刻生、山陰人、
工篆隸、精繪事、與同志創西冷印社於滬上、著印譜泉譜
磚存等、創造宋版活字、享年五十六、葬於紹興柯橋鎮型

地震の前の年、武藏野會の催にて、向嶋の社寺にて什



物を見せしことあり、其時其角堂にて、例の半面
美人の印を見る、朱銅にて大體圖のこときものな
り、共古先生曰、五元集を見れば、此印を新にほ
りたる様に記されたれど、今見れば正しく鑄銅印
にて、鑄りたるものに非ず、且つ鈕のさま元押か
と思はる、然も決して近來の偽物とは見えねば、恐らく
其角の用ひたるは、この印ならむに、五元集の記事とい
いぶかしくこそ云々。又其時硯一面あり、桑の蓋、硯背
に寶晋齋と篆字にて鑄る、箱に

寶晋齋硯に三弄子より晋子に所與す又受て我家に藏す
る事數年天明丁未春回祿にあへり三弄子の贈り狀は失
ふといへとも幸に硯は全く爰に存す。寛政元 巢鴨隱
士暮潮誌

とあり、これも共古先生機一に開けば各所に三面模した
るものあるよし今も恙なきや否。

木内醉石翁の家職は、小十人御番とて江戸城内に詰めて
居るなり、以上祖父和三四郎、父榮二二郎か三郎か忘れたり名を
僕といふ、市谷甲良町に邸あり、江戸切繪圖に見ゆ焼餅
坂の中途を南へ入りて又東へ入りて北側也、翁は房之助

塘小麓山、

三〇

大正壬戌の秋、長尾雨山富岡鐵齋などの催にて、赤壁夜遊



に擬したる觀月會
を、宇治川にてせ
しに、九州乃至越
後などよりも参加
せるありて、三百
餘人の大連なり、
東京よりは菊池惺
堂なども出かけぬ
定めし泉下の東坡
居士も仰天したる
べし、此夜東京は
晴天なりしに、彼
地急雨あり、皆々
慌てて休憩所へ逃
こみしに、新調の
絁毛氈今出来と見え、濡衣裳で腰をかけし先生、いづれ
も御尻を眞赤にして、此れが本統の、赤壁と其時黃檗に
居たる永谷八瀬翁よりの通信、



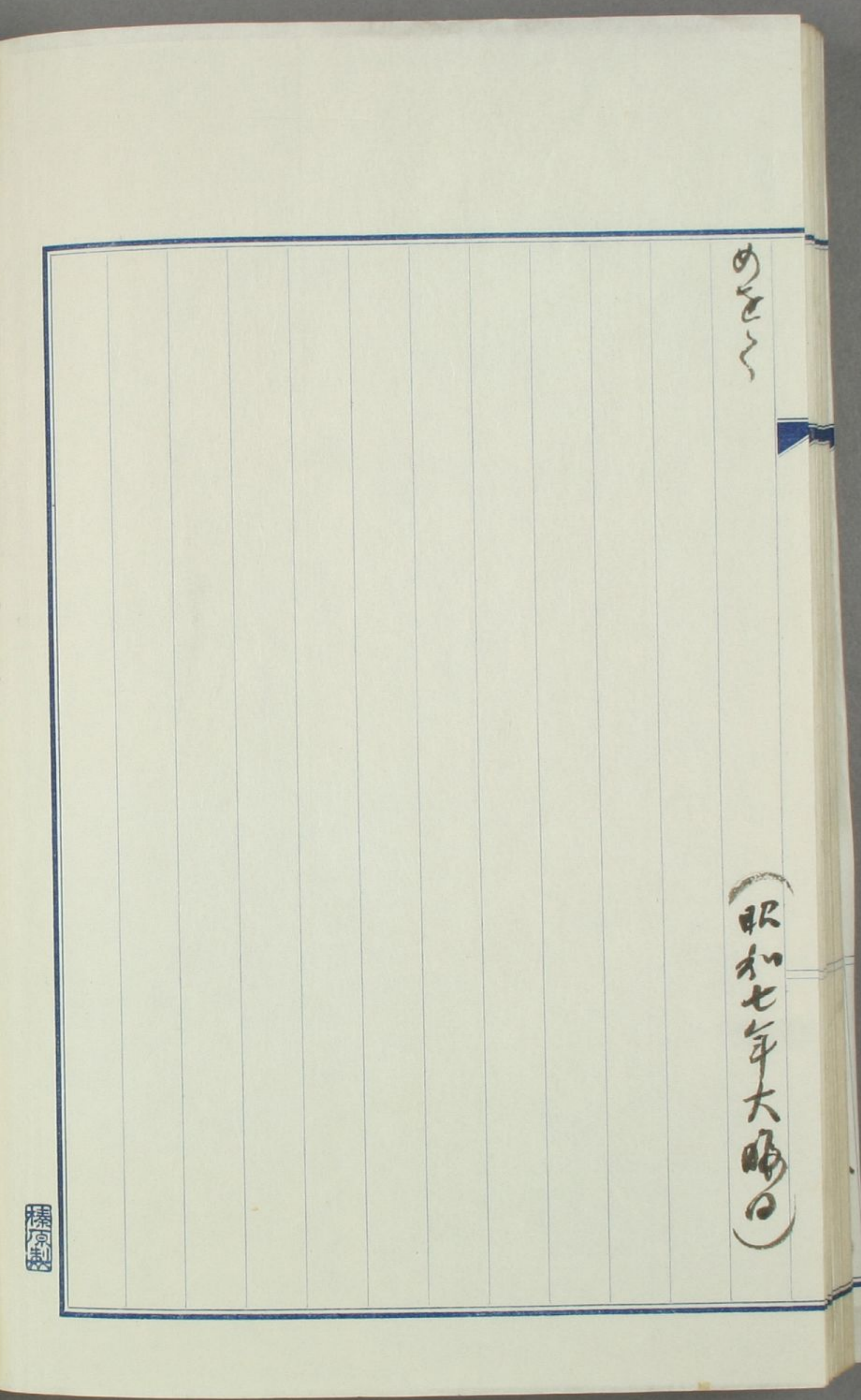
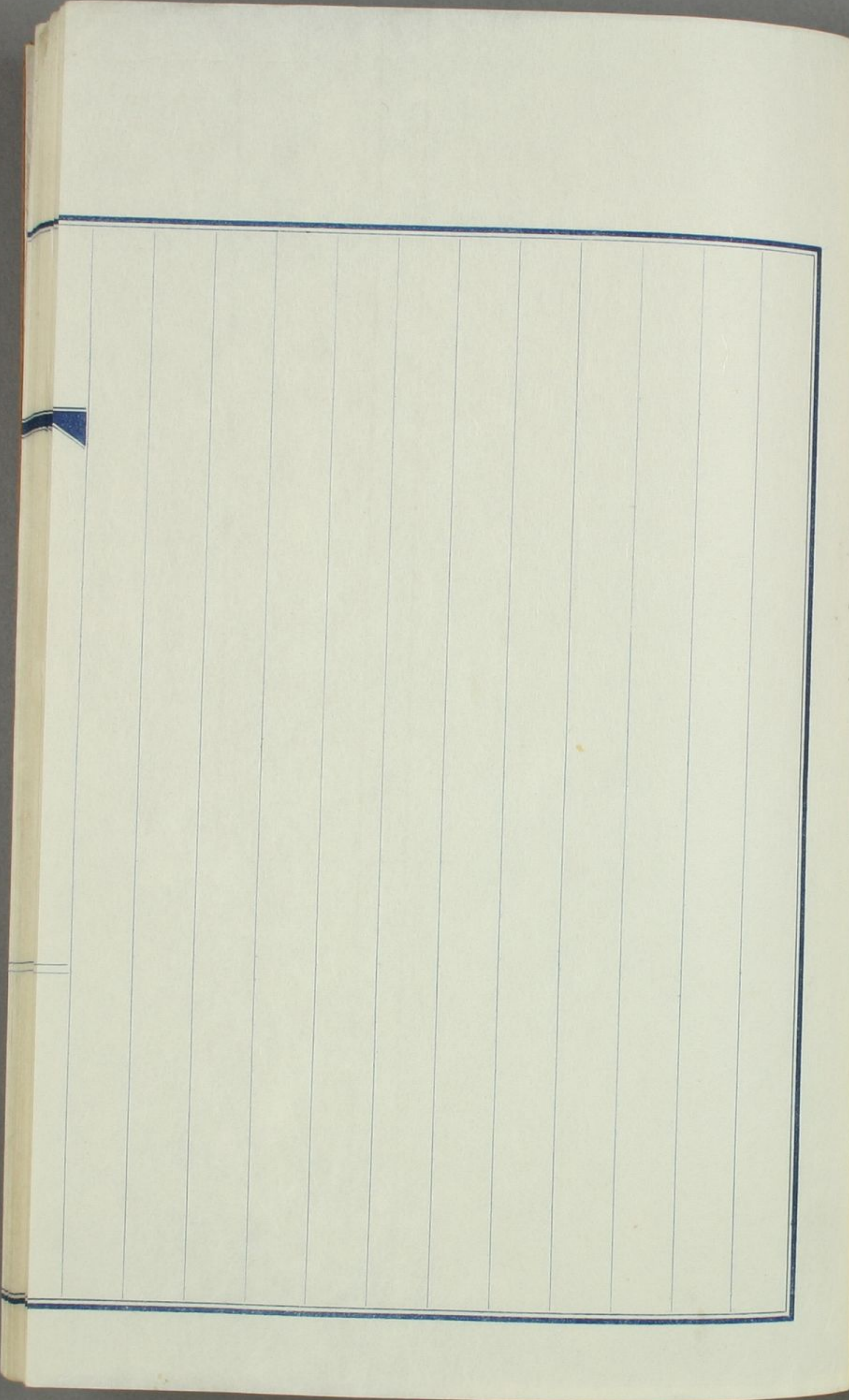
重道といひしが、維新後、上地して静岡へ行き、百五十



坪の土地を頂きそこ
へ家を建てて住みぬ
百官名を禁ぜられし
かば、愚と改名せし
由。是より先、初め
調練の太鼓を習ひし

かば、呼出されて銃隊に居たり、彰義隊戦争の日は、天
璋院様守護として、五十人斗、今の一ツ橋の女子職業學
校の所に詰めて居たりしが、官軍が門を閉ぢてしまひ、
外へは出さざりし由。翁静岡に移りて後、塚原澁柿園の
父なる臺園に書を學びたり、此臺園は智永の帖の外の法
帖は、決して見ず、臺園江尻に居られし故、翁は静岡よ
り江尻まで三里の道を日々手習に通ひたりとぞ、翁後に
海軍の編輯とひふことを務めて、小石川武島町に廣き邸
地を持ちて、其中へ小やりなる家を構へ、噴き井の水を
引き詩經にある様なる唐棣菜菓などといふものを植ゑ
て、詩書畫篆刻などにたのしまれたり。其鄙吝先生翁が
潤筆など望まれぬをいゝ幸ひにして、色々印をほらせ、
翁が當世に迂なるをつけ目に、今は至廉なる半兩貨泉を
有難さうに謝儀としては持ち行き持ち行きしけるが、翁

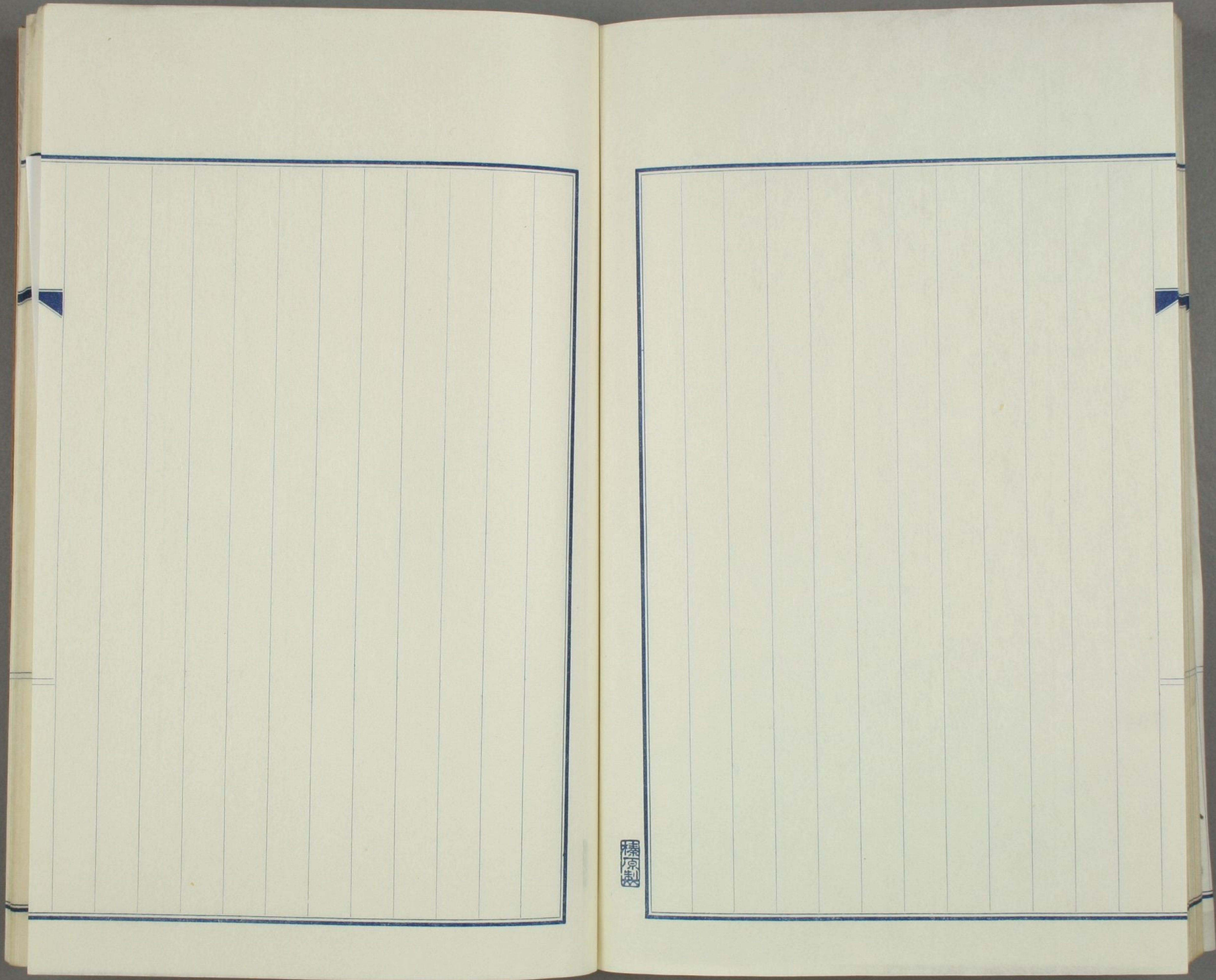
三一



のり

昭和七年大晦日

福



雙河

以下
20丁
白紙



星岡齋藏

類川作赤繪鉢

（東京印刷社蔵）

標原製

A large rectangular area on the right page, enclosed by a blue border. It contains numerous vertical blue lines, creating a grid for handwritten notes or a list. The lines are evenly spaced and extend across the width of the page.

